

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (77)

地方特定道路整備事業（新富1工区・宮前通線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ばく ろう ちょう 遺 跡
博 労 町

(肝属郡高山町)

2004年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



序 文

この報告書は地方特定道路整備事業に伴って、平成10年度に実施した肝属郡高山町に所在する博労町遺跡発掘調査の記録です。

高山町は国指定史跡塚崎古墳群をはじめとする多くの高塚古墳・地下式横穴墓の所在する地として知られています。また近年、東田遺跡・後田山下遺跡など弥生時代から古墳時代にかけての集落の調査も行われ、多くの成果をあげています。

こうしたなかで博労町遺跡は、高山川の近くにある河岸段丘上に営まれており、その性格が注目されていましたが、発掘調査によって竪穴住居跡・溝状遺構などで構成される集落の一端が見つかりました。また、出土した土器のなかには全体の形がわかる多くの完形品もあり、製作技法などでは瀬戸内系のもの、北九州系のものもあって他地域との交流の様子もうかがわせます。

この調査の成果が地域の歴史研究や埋蔵文化財の啓発普及の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり御協力いただいた鹿児島県土木部、高山町教育委員会ならびに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申しあげます。

平成16年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 木 原 俊 孝

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ばくろうちょういせき							
書 名	博労町遺跡							
副 書 名	地方特定道路整備事業（新富１工区・宮前通線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第77集							
編 集 者 名	池畑耕一・鶴田静彦							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899－4461 鹿児島県国分市上之段1175番地１ TEL0995－48－5811							
発 行 年 月 日	西暦2004年12月20日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯	東経	調 査 期 間	調 査 面 積 ㎡	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
ばくろうちょういせき 博労町遺跡	か ー ぎ 県 鹿児島県 きもつきぐんこうやまちょう 肝属郡高山町 しんとみあざばくろうちょう 新富字博労町	46484		31度 20分	130度 59分 22秒	試掘調査 1998 6 本調査 1998 1019 ～ 1998 1106	223	地方特定道 路整備事業
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項
博労町遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世		竪穴住居跡 1軒 竪穴住居跡 1軒 溝状遺構 2条 土坑 3基	弥生土器・磨製石鏃・砥石 土師器 須恵器 土師器・陶磁器 陶器・ふいご羽口			



遺跡位置図

例 言

- 1 本報告書は鹿児島県土木部（都市計画課）が行った地方特定道路整備事業（新富1工区・宮前通線）に伴う博労町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県土木部（都市計画課）から鹿児島県教育委員会が受託し実施した。
- 3 発掘調査は平成10年10月19日～11月6日に実施し、整理作業及び報告書作成は平成16年度に実施した。
- 4 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 5 挿図の縮尺は、各図面にスケールで示した。
- 6 本書で用いたレベル数値は、工事施行図にある水準点を基準とした。
- 7 現場での実測・写真撮影、遺物の実測・写真撮影・浄書等は鶴田・大久保・黒川・桑波田・池畑が分担して行った。
- 8 本書の執筆・編集は池畑が、図版の作成・編集は鶴田が行った。
- 9 出土した遺物は、県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、本遺跡の遺物注記の略号はBKRである。

目 次

カラーグラビア

序 文

報告書抄録

遺跡位置図

例 言

目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 報告書作成までの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査の経過（日誌抄）	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第Ⅲ章 層位	6
第Ⅳ章 調査の概要	7
第1節 遺構	9
1. 竪穴住居跡	9
2. 溝状遺構	15
3. 土坑	16
4. 柱穴	17
5. 土器溜まり	17
第2節 遺物	19
1. 弥生土器	19
2. 成川式土器	22
3. 古代以降の土器	24
4. 土製品	25
5. 石製品	26
第Ⅴ章 まとめ	
1. 低地への進出	28
2. 弥生時代遺物の位置づけ	28

3. 古墳時代土師器の特質	29
4. 古墳とその居住地	30

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡	4	第10図 溝状遺構	15
第2図 標準地層柱状図	6	第11図 土坑	16
第3図 周辺地形と調査地点図	7	第12図 土器溜まり出土の遺物	18
第4図 B区・C区遺構配置図	8	第13図 弥生土器(1)	20
第5図 1号住居跡とその出土遺物	9	第14図 弥生土器(2)	21
第6図 2号住居跡	11	第15図 弥生土器(3)	22
第7図 2号住居跡出土の土器(1)	12	第16図 古墳時代の土器	23
第8図 2号住居跡出土の土器(2)	13	第17図 古代以降の土器	
第9図 2号住居跡出土の石器	14	・土製品・石製品	25

表 目 次

第1表 周辺の遺跡地名表	5	第3表 土器観察表(2)	27
第2表 土器観察表(1)	26		

図 版 目 次

図版1 ①1号・2号住居跡検出状況	図版6 ①1号住居跡出土の遺物
②1号住居跡	②土器溜り出土の遺物
図版2 ①2号住居跡遺物出土状況	図版7 2号住居跡出土の遺物
②2号住居跡遺物出土状況	図版8 弥生土器と古墳時代の土器
図版3 ①溝1, 2及び土坑	図版9 弥生土器と古墳時代の土器
②溝1, 2の切りあい(西側から)	図版10 弥生土器
③溝1, 2の切りあい(東側から)	図版11 弥生土器
図版4 ①溝2及び断面	図版12 弥生土器
②溝1及び断面	図版13 成川式土器
図版5 ①溝2遺物出土状況	図版14 古代以降の遺物
②溝2遺物出土状況	
③土坑	

第 I 章 調査の経過

第 1 節 報告書作成までの経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部都市計画課（鹿屋土木事務所）が計画していた地方特定道路整備事業（新富 1 工区・宮前通線）に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、平成10年に鹿児島県教育庁文化財課（以下文化財課）に照会した。これを受けて文化財課が平成10年 6 月に試掘調査を実施したところ、事業区域内に博労町遺跡が所在することが判明した。調査対象面積は約400㎡と推定された。

この結果を受けて、都市計画課・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）は協議し、現状保存や設計変更が不可能であることから、記録保存のための緊急発掘調査（本調査）を実施することとなった。

本調査は平成10年10月19日から11月 6 日まで、400㎡を対象として、埋文センターが実施した。

また報告書作成については、平成16年度に整理作業を行い、同年に刊行することとなった。

報告書作成は、埋文センターで、平成16年 4 月から 9 月まで実施した。

第 2 節 調査の組織

〔発掘調査－平成10年度〕

事業主体	鹿児島県土木部都市計画課（鹿屋土木事務所道路建設課）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	県立埋蔵文化財センター	所 長	吉永 和人
調査企画者	県立埋蔵文化財センター	次 長 兼 総 務 課 長	尾崎 進
	〃	調査課 調 査 課 長	戸崎 勝洋
	〃	〃 課長補佐兼第一調査係長	新東 晃一
	〃	〃 第一調査係主任文化財主事	青崎 和憲
調査担当者	〃	〃 〃 文化財主事	鶴田 静彦
	〃	〃 〃 文化財主事	大久保浩二
調査事務担当	〃	総務課 主 査	前屋敷裕徳
	〃	〃 主 査	政倉 孝弘
	〃	〃 主 事	溜池 佳子

〔報告書作成－平成16年度〕

事業主体	鹿児島県土木部都市計画課（鹿屋土木事務所道路建設課）		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	県立埋蔵文化財センター	所 長	木原 俊孝
調査企画者	県立埋蔵文化財センター	次 長 兼 総 務 課 長	賞雅 彰
	〃	調査課 調 査 課 長	新東 晃一
	〃	〃 調査課長補佐	立神 次郎
	〃	〃 主任文化財主事兼第一調査係長	池畑 耕一
	〃	〃 主任文化財主事	中村 耕治
担 当 者	〃	〃 主任文化財主事兼第一調査係長	池畑 耕一
事務担当	〃	総務課 総 務 係 長	平野 浩二
	〃	〃 主 事	福山恵一郎
報告書作成検討委員会	平成16年10月14日	所長ほか	9 名
報告書作成指導委員会	平成16年10月 5 日	調査課長ほか	7 名
企 画 委 員		鶴田静彦・川口雅之	

第 3 節 発掘調査の経過（日誌抄）

10月19日（月）から11月6日（金）までの13日間実施した。

19日（月）くもり	器出土。B区遺構検出状況平板実測。C区 道具を始良町重富から搬入。重機により 表土はぎ。E区掘り下げ。	およびD区包含層掘り下げ。
20日（火）はれ	D区・E区掘り下げ。	C区掘り下げ、竪穴住居跡を検出。 D区の掘り下げ。
21日（水）くもり	D区・E区掘り下げ。	2日（月）くもり 黒川忠広・桑波田武志支援。B区の溝・ 土坑・柱穴を平板実測。C区5層掘り下げ。
22日（木）くもり	C区・D区掘り下げ。D区包含層から多 くの遺物が出土した。	1号・2号竪穴住居跡掘りあげ。
23日（金）くもりのち雨	C区・D区包含層掘り下げ。	4日（水）くもり 1号・2号竪穴住居跡掘りあげ。 C区5層掘り下げ。
26日（月）くもり	A区～C区掘り下げ。	5日（木）くもり 1号および2号竪穴住居跡の精査、写真 撮影・実測。C区5層掘り下げ。
27日（火）くもり	A区5層・B区・C区掘り下げ。	6日（金）くもり時々雨 周辺の整備。道具を埋文センターへ運搬。
28日（水）くもり	B区で溝検出、掘り下げ、完形の埴形土	

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

博労町遺跡の所在する肝属郡高山町は、大隅半島のほぼ中央にあり、北側には大隅半島最大の肝属川を境として東串良町や串良町、西側は吾平町や鹿屋市、南側は甫与志岳（968m）を中心とした国見岳山系の山々となり内之浦町や大根占町に接している。また、東側は志布志湾の南端付近に面している。

地勢は、概して南側が高く北側へ行くにつれ次第に低くなり、東側は海岸部まで山地が迫っており急崖を呈し海へ落ちている。国見岳山系を源とする高山川や荒瀬川等の中小河川は南側から肝属川へ流れ込んでいるが、その間に浸食谷を多く形成している。

一方、国見岳山地から北側へは、標高20mから60mの緩やかな台地が広がり、そこから低地へと伸びているが、境付近には舌状台地も多くみられる。さらに、低地にあたる肝属川流域は県内ではもっとも広大な水田地帯を形成している。

博労町遺跡は高山町新富字博労町に所在し、肝属川支流の高山川右岸に形成された河岸段丘の先端付近に立地している。標高は6.5mから8mで、低地との比高も数mしかない。旧高山駅周辺につくられた商店街のなかにあって、まわりは人家が建ち並んでいる。

第2節 歴史的環境

高山町の地勢からして、縄文時代以前の遺跡は少なく、旧石器時代の遺跡はこれまで確認されていない。

縄文時代の遺跡も少なく、早期から後期の遺物が出土している後田山下遺跡や、早期の鐘付・岩屋遺跡、中期の山下ノ上・道中原・東田遺跡、後期の道中原遺跡などが知られている。このなかでは後期の遺跡が多く、瀬戸宇治A遺跡・瀬戸宇治B遺跡・道中原遺跡・片野遺跡などでは指宿式土器・市来式土器が出ている。また低地にある東田遺跡では市来式土器・御領式土器・黒川式土器・夜臼式土器など後期中頃から晩期にかけての土器が出ており、後期後半の中岳式土器期の竪穴住居跡1軒も発見されている。低地への進出時期が注目される。

弥生時代になると各地で集落が営まれており多くの遺跡が発見されている。特に中期には多く、出土品の中には瀬戸内系の土器や抉り入り石包丁なども見られる。住居跡は上原（中期：1軒）・波見西（中期：5軒）などの遺跡で発見されており、低地へ進出していることから、肝属川下流域での稲作農耕が開始されているようである。石庖丁や粃殻圧痕土器など稲作農耕を物語る出土品が瀬戸口原C・永野原・松山・上原・波見西などの遺跡で出土している。

古墳時代になるとさらに集落は増え、大戸原（14軒）・後田山下（3軒）・東田（40軒）・上原（1軒）・永野原（6軒）などの遺跡で竪穴住居跡や溝状遺構などが発見されている。軍並木や東田・軍原遺跡では須恵器も出土しており、畿内などとの交易が考えられる。後田山下遺跡の住居跡で出土した甕形土器は脚台のない長胴丸底甕であり、高环形土器・鉢形土器などとともに在地のものとは違った形をしている。このような土器は、少量出土することはあってもここみたいに主体となることはなく、この集落の性格の違いが注目される。この時期には前方後円墳・円墳なども多く



第1図 周辺の遺跡（2万5千分の1図）

第1表 周辺の遺跡地名表

番号	遺 跡 名	所 在 地	地 形	時 代	遺 物 等	備 考
1	塚の下古墳群	串良町上小原	台地	古墳	前方後円墳1・円墳4	
2	上小原古墳群	串良町上小原	台地	古墳	前方後円墳1・円墳20・地下式横穴	
3	栄田A	串良町上小原栄田	扇状地	弥生～近世	溝状遺構・弥生土器・土師器・須恵器・染付・磨製石剣	平成6年発掘調査
4	栄田B	串良町上小原栄田	扇状地	弥生	弥生土器	平成4年農政分布調査
5	島元	串良町下小原島元	扇状地	縄文～歴史	溝状遺構・弥生土器・土師器・須恵器・染付・磨製石剣	平成6年発掘調査 旧名「島元A」「島元B」を統合
6	白寒水上	串良町下小原白寒水上	台地	弥生	弥生土器	
7	白寒水城跡・五輪塔群	串良町白寒水4132	台地	中世（鎌倉初）	納骨五輪1・五輪塔群・板碑	(町)昭和57. 1. 22
8	鍋池之上	串良町下小原鍋池之上	台地	弥生・古墳	弥生土器	
9	後藤迫	串良町下小原後藤迫	台地	縄文（早・晩）・弥生（中）・古墳	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器	町埋文報(2)
10	村迫	串良町下小原村迫	台地	弥生・古墳	弥生土器・土師器	
11	稲村城跡	串良町下小原	丘陵	古墳・中世・近世	山城・成川式・土師器・須恵器・青磁・白磁・染付・備前焼・古銭・古道1・近世墓16	町埋文報(4)
12	古園・中村城跡	串良町岡崎古園	台地・丘陵	縄文（早）・弥生・古墳・中世	石坂式	
13	岡崎城跡・北田ノ上古墳群	串良町岡崎北田ノ上・城ヶ鼻	台地	古墳・中世	地下式横穴2・山城	
14	大園	東串良町池之原	低地	古墳	土師器	平成9年農政分布調査
15	堅田	串良町上小原岡崎堅田	低地	古墳	成川式	
16	吉元	東串良町川西吉元	低地	弥生		
17	西ノ丸	串良町下小原西ノ丸	扇状地	弥生, 歴史	須恵器・ミニチュア土器・吉ヶ崎式・山ノ口式	平成4・11年確認調査
18	下伊倉城跡	東串良町新川西	微高地	弥生・中世	弥生土器・城跡	
19	下住	高山町前田下住	低地	弥生（中・後）	完全土器	工事中発見
20	内園	高山町前田三反内園	低地	弥生（中・後）	弥生土器	工事中多量に出土, 戦災後紛失
21	上ノ原古墳	高山町前田上ノ原	台地	古墳	円墳・凝灰岩組合せ式石棺・内部朱塗・直刀・鉄斧・鉄剣・刀子・人骨・イ方製鏡	
22	西宮地下式横穴	高山町前田西町西宮神社	台地	古墳	箱形凝灰岩組合棺（箱形）	
23	上ノ原地下式横穴群	高山町前田上ノ原	台地	弥生（中・後）・古墳	弥生土器・地下式横穴8	
24	竹田神社	高山町前田上西方日新	台地		日新院（日新公の長女阿南創建）	日新院の跡
25	下西方地下式横穴	高山町前田下西方	台地	古墳	舟形軽石組合棺	
26	堂園の上	高山町野崎上原	台地	弥生（中）・古墳	弥生土器・磨製石斧・住居跡	昭和33年発見, 昭和52年確認調査
27	合戦陣跡	高山町前田西方	台地	中世		別称「大脇城」
28	上西方	高山町前田上西方	台地	弥生（前・中）	弥生土器	
29	川路	高山町新富川路	台地	弥生, 歴史	弥生土器	
30	弓張城跡	高山町新富字城山他	丘陵	中世	山城	(別名) 麓ノ城
31	博労町	高山町新富字博労町	段丘	弥生～近世	竪穴住居跡2 山ノ口式・磨製石鏃・成川式	本報告書
32	東横間	高山町新富東横間	台地	弥生（中・後）	弥生土器	
33	横間地下式横穴群	高山町新富横間	台地	古墳	地下式横穴11	
34	丸岡古墳群	高山町高山町墓地周囲他	台地	古墳	円墳7	
35	下之迫	高山町新富字下之迫	台地	古墳	土師器	平成6年度土木分布
36	塚崎古墳群	高山町野崎塚崎	台地	弥生～古墳	前方後円墳4・円墳39・弥生土器	国史跡

造られ、これらは日本最南端に立地するものである。塚崎古墳群は台地縁辺に前方後円墳4基、円墳39基が造られている。前方後円墳4基の年代はこれまで5世紀前半とされてきたが、近年の測量による図面分析からいずれも4世紀以前のものとされ、古いものは3世紀にさかのぼる可能性があるとする考えもある。この上流にある岡崎古墳群でも近年の調査によって4世紀にさかのぼる可能性のある前方後円墳が発見されるとともに、それに続く円墳・地下式横穴墓群も調査されている。この調査によって鉄鋌・^{てい}長方板革綴短甲・頸甲・勾玉・管玉など豊富な出土品が発見され、この地域の古墳被葬者が多くの貴重品をもった権力者である可能性を秘めている。他に円墳のみで構成される古墳群として辺塚・辻・軍原・宮ノ上・上ノ原などがある。在地の墓とされる地下式横穴墓も塚崎・上ノ原・西横間などで群として存在している。これらの墓には軽石石棺も置かれ、刀剣・斧・鏃などの鉄製品、馬具・貝釧などが出土している。

古代の遺跡は調査例が少ないが、波見西遺跡では掘立柱建物3棟が発見されており、西山ノ上遺跡では風字硯が採集されている。大園遺跡では墨書土器も出土している。

中世になると肝付氏が後田に山城（高山城）を築くが、他にも和田城・検見崎城などの山城が築かれる。また平後園遺跡では東播系こね鉢も採集されている。

（主な参考文献）

- ・鹿児島県立埋蔵文化財センター『東田遺跡』（『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』16）1996
- ・（財）元興寺文化財研究所『永野原遺跡』（『高山町埋蔵文化財発掘調査報告書』7）2000
- ・（財）元興寺文化財研究所『鐘付遺跡』（『高山町埋蔵文化財発掘調査報告書』9）2002
- ・中村耕治「先史・原始時代」『高山町郷土史』1997

第Ⅲ章 層位

当遺跡は低地にある河岸段丘であるため基盤層は砂層となっているが、それまでに6枚の地層がある。

1層は表土にあたる層で、黒褐色砂質土である。2層は明茶褐色土である。3層は旧水田層と思われる層で、黒褐色土である。4層は黄褐色土、5層は黒色土である。6層は灰褐色砂質土で、弥生土器などが包含されている層である。7層は基盤となる黄褐色砂で、遺構の多くはこの層を掘り込んでいる。

1	1層 表土
2	2層 明茶褐色土
3	3層 黒褐色土
4	4層 黄褐色土
5	5層 黒色土
6	6層 灰褐色砂質土
7	7層 黄褐色砂

第2図 標準地層柱状図

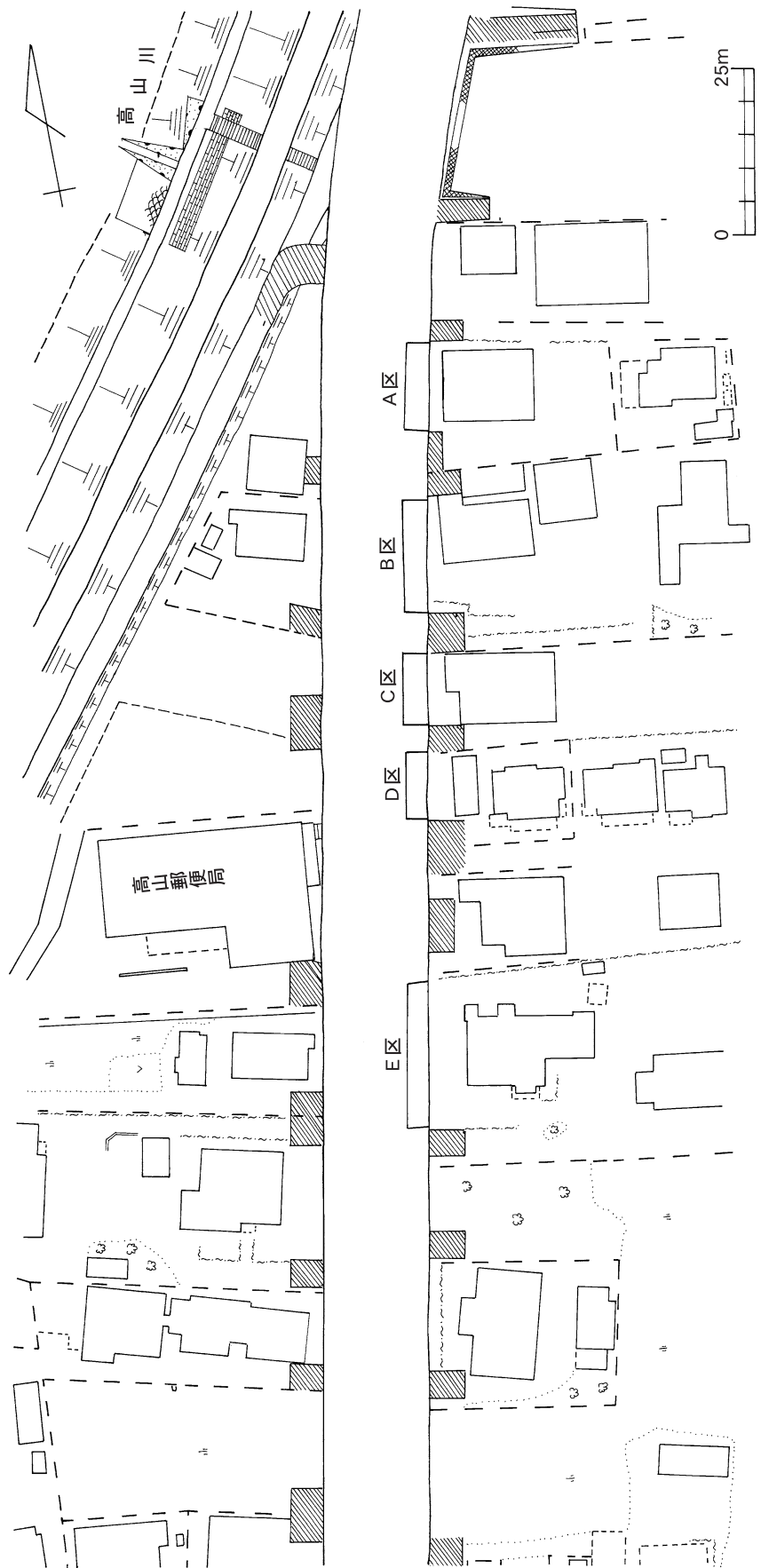
第IV章 調査の概要

調査は道路の東側にある幅3～4mの拡幅部分，南北の長さ約100mを対象地としたが，10～15mごとに道路から民家への進入口があったため，調査できなかった部分がある。そのため5か所に分けて調査し，調査区は北からA区・B区・・・E区と呼んだ。

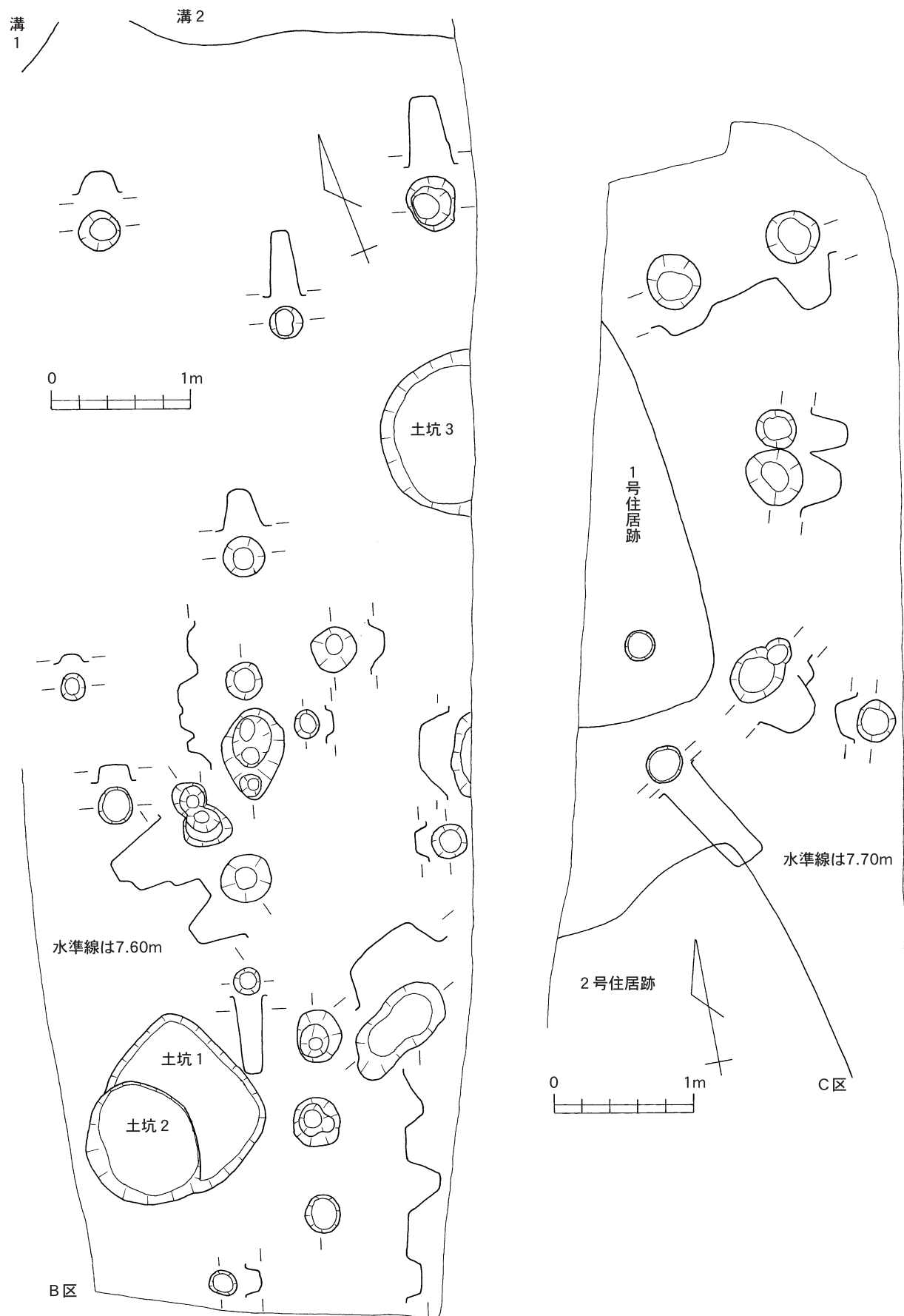
調査した範囲内では中央から南あるいは北へゆるやかに傾斜している。A区の地層は北へ下降しており，5層から成川式土器が3点出土したのみであった。E区は攪乱層が厚く，その下は沼沢状の堆積となっていたが，このような堆積状況は他の区ではみられなかった。遺構・遺物とも発見されなかった。

B区では北側に切りあつた2条の溝があり，他に土坑3基と，柱穴20数基が検出された。柱穴のなかには弥生土器，成川式土器のはいったものもあるが，時期は不明である。基盤層は水平となっていた。

C区では基盤の砂層を掘り込んだ竪穴住居跡が2軒検出され，多くの土器が出土した。また，柱穴8基も



第3図 周辺地形と調査地点図



第4図 B区・C区遺構配置図

あった。

D区でも多くの土器が出土し、基盤層は南側へ下降している。

調査面積はA区が40㎡、B区が54㎡、C区が33㎡、D区が30㎡、E区が66㎡であり、総面積は223㎡となる。

第1節 遺構

発見された遺構は竪穴住居跡2軒、溝状遺構2条、土坑3基、柱穴多数である。

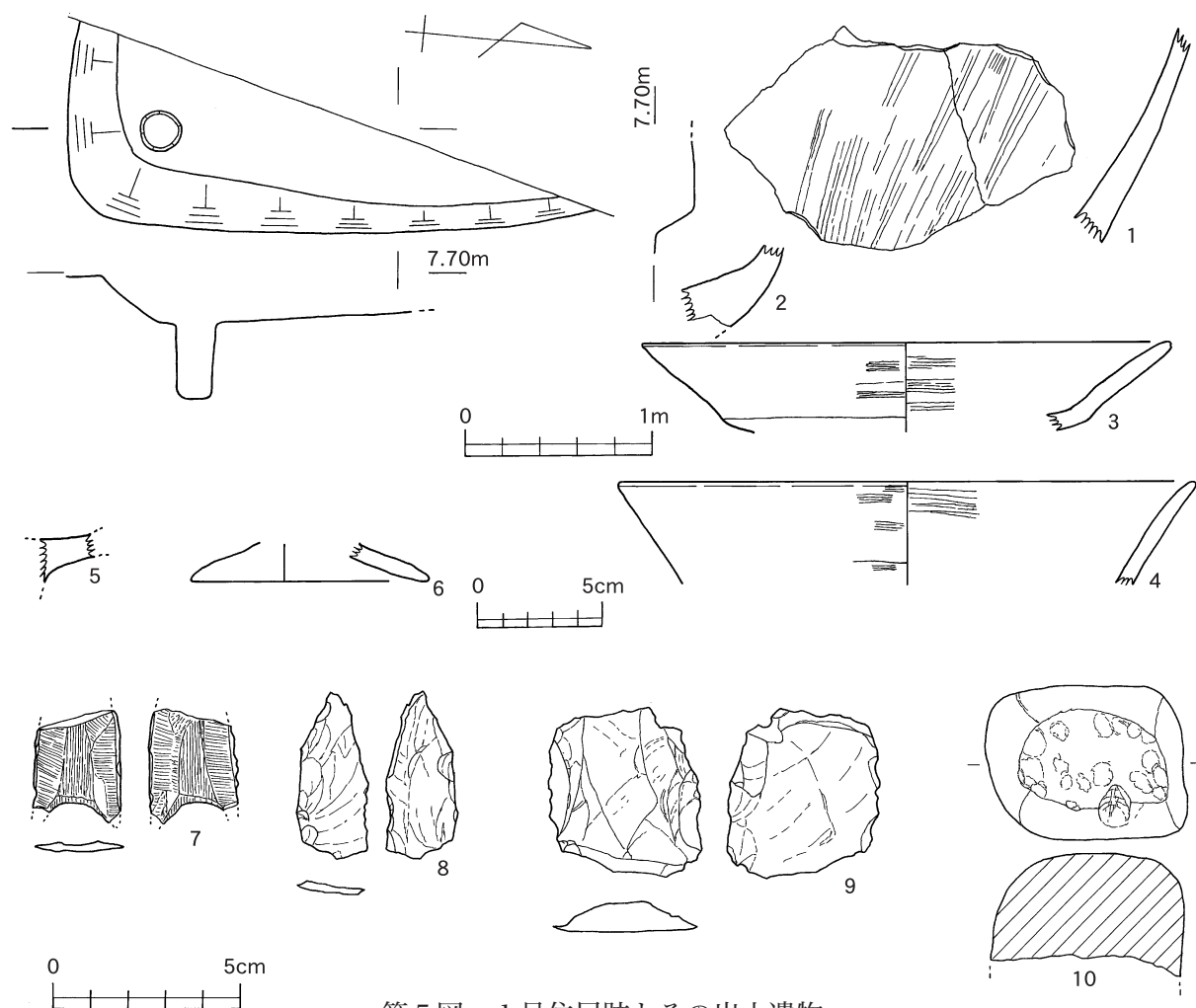
1. 竪穴住居跡

1) 1号住居跡

C区で発見された方形竪穴住居跡であるが、南東隅しか発見されていないため規模ははっきりしない。南北方向が2.9m以上、東西方向が1.1m以上あり、深さは約20cmある。南東隅付近に直径20cm、深さ40cmの柱穴がみられるものの1本だけであり、配置等は不明である。

1号住居跡では成川式土器20点（甕形土器14、壺形土器1、高坏形土器5）、磨製石鏃1点、未製品2点、叩石1点が出土している。

1は甕形土器の底部近くの破片で、内外とも縦方向のヘラナデで仕上げている。調整はていねいで、外面の一部は光沢もみられる。外面にはススが、内面にはこげが付着している。外面は淡茶褐色



第5図 1号住居跡とその出土遺物

色を呈しているが、部分的には赤みがかっている。内面は黄みがかった淡茶褐色をしている。石英・黄色石などの細石粒を多く含む砂質土を用い、焼成は良好である。2は壺形土器の底部近くで、外面はヘラによるていねいなナデ、内面はヘラナデで仕上げている。茶褐色を呈している。胎土は3mm大の石粒もあるが、金雲母・石英などの微石・細石を含む砂質土を用いている。

3～6は高坏形土器である。坏部は底部から口縁部が外へ開くもので、浅い。3の坏部は口縁直径が20.6cmで、深さは約4cmである。内外ともヘラによる横方向のナデで仕上げ、茶褐色を呈しているが、内側は2次的に黒色化している。雲母・石英などの微石粒を多く含む細砂質土を用い、焼成は良好である。4の口縁直径は23.2cmと大きく、3より深い。内外ともヘラによる横方向のていねいなナデで仕上げ、内面はミガキに近い。淡茶褐色を呈し、白色石・石英などを含むこまかい砂質土を用いている。焼成度は良く堅い。3・4ともに同一個体と思われる破片がそれぞれ他に各1点ずつある。5は坏部と脚部のつぎ目である。内面はヘラミガキ、外面はヘラナデで仕上げている。白色石・石英などの細礫を用いているが、坏部に比べやや粗い土であり、焼成度は良い。6は4と同一個体かと思われる色・胎土・焼成度である。ハの字状に広がる裾部で直径が9.5cmある。

これらの土器は古墳時代前期のものである。

石器には磨製石鏃1点、磨製石鏃未製品2点、叩石1点がある。

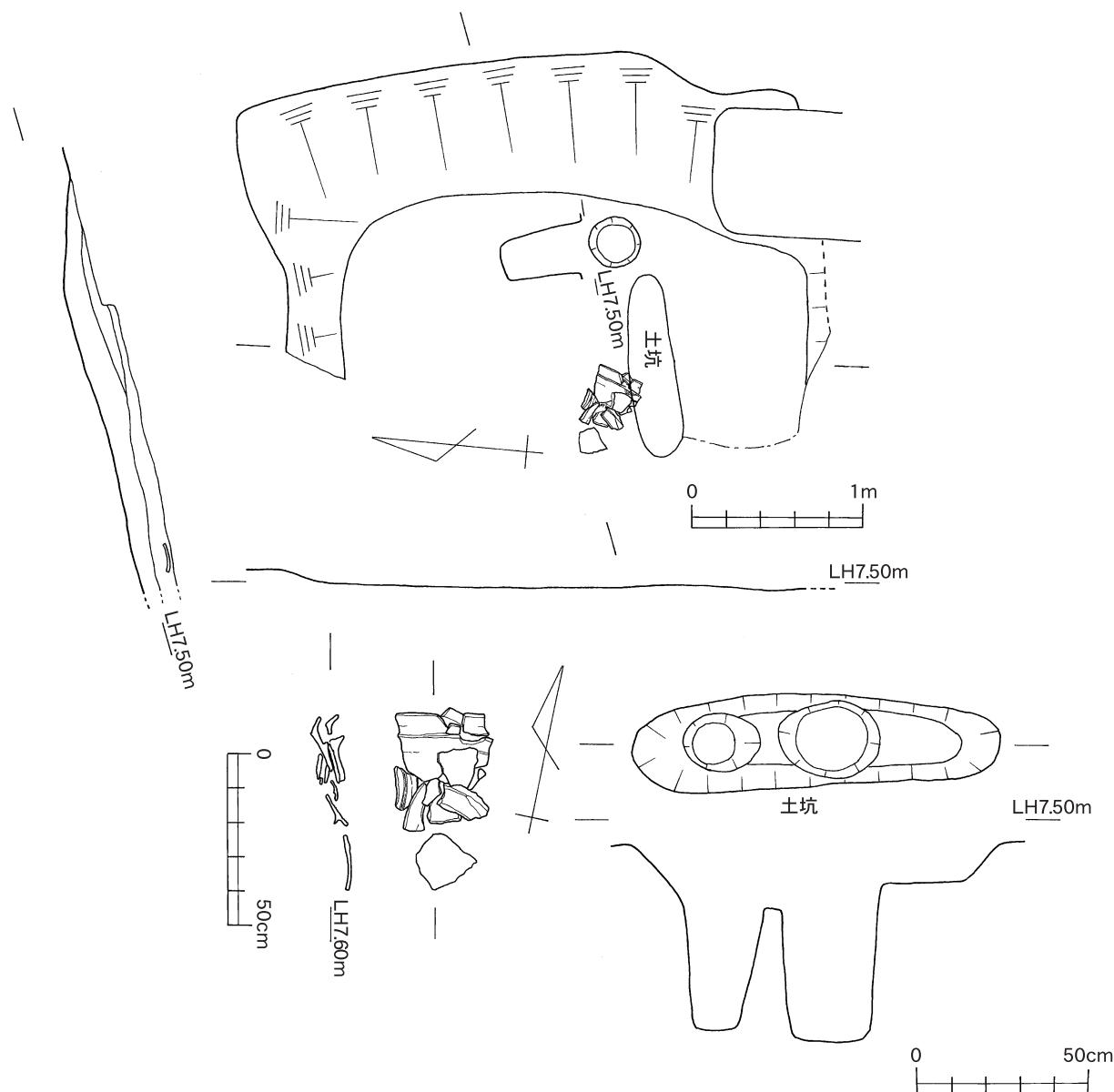
磨製石鏃は先端部と脚端部が欠けているが、頁岩製のえぐりのある長身鏃である。現存の長さが3cm、幅が2.4cm、厚さが0.3cmである。内外とも横方向にていねいにみがいているが、中央部は内外とも縦方向に溝状のくぼみをつくっている。えぐり部分も縦方向にみがいている。8・9はともに、頁岩製の石鏃未製品で、8は周辺の一部を打ち欠いて形を整えている。横剥ぎ剥片を縦方向に用いている。長さが4.5cm、幅が2cm、厚さが0.3cmである。9も頁岩であるが、厚さが0.8cmとまだ加工は進んでいない。10は砂岩の棒状叩石で、先端部に敲打痕がみられる。5.5cm×4cmの直方体をしており、高さ4cmで折れている。

2) 2号住居跡

C区で発見された方形竪穴住居跡であるが、南側を広く破壊されている上に、西側が掘れなかったため全容は不明である。推定では南北方向が約3.5m、東西方向が約2.5m、深さが約20cmある。東側に直径30cm、深さ50cmの柱穴と思われるピットがある。床面は黄褐色砂で、その上の埋土は3層に分かれている。最下層は上部に黄褐色砂のブロックが含まれる茶褐色砂質土で約15cmの厚さがある。出土品はない。中層は粘質土をやや多く含む暗茶褐色砂質土で、東側にみられる。出土品はない。最上層は粘質土を多く含む暗茶褐色砂質土で、廃棄された遺物を多く含む。中部に東西に長い平面形が110cm×30cm、深さ10cmのだ円形をした土坑があり、この中には直径20cmと30cm、深さ45cmほどの2個の柱穴がある。この土坑の近くに大甕の口縁が重なって出土しているが、出土状況からして別地点で大きく割れたか、あるいは割った破片を持ち込み、瓦を重ねるようにして意識的に置いたものと思われる。

2号住居跡では土器・石器が出土している。弥生土器5点、成川式土器2点、土師器1点が、石器には頁岩剥片8点、砥石3点がある。また、住居内の柱穴2および柱穴3から弥生土器片各2点が出土している。

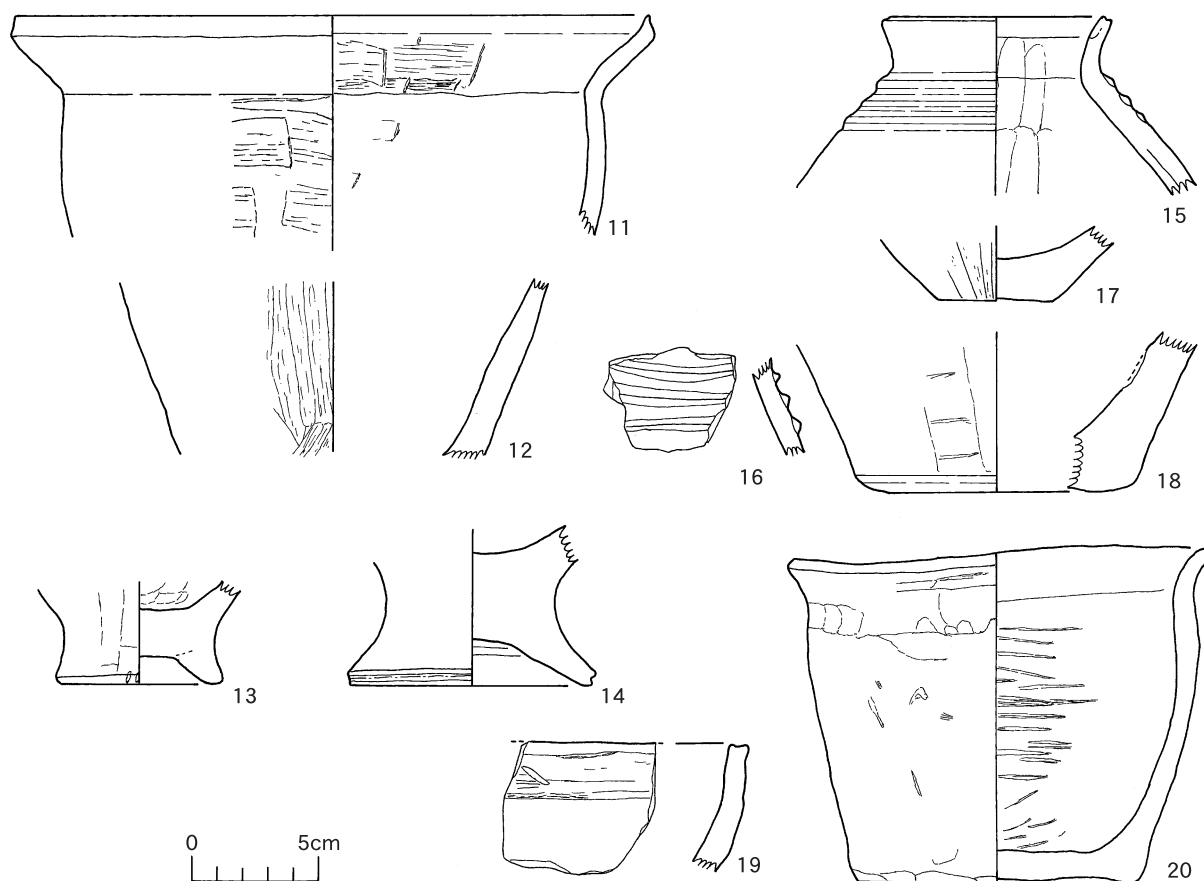
土器には甕形土器・壺形土器・鉢形土器・大型甕形土器がある。



第6図 2号住居跡

11～14が甕形土器である。11は口縁直径が25cmのくの字状口縁となるものである。口縁端はくちばし状にまっすぐ立ちあがり端はとがっている。外面はややくぼんでおり、内面は軽い段をもって頸部へ向かう。頸部内面は明瞭な段をもって屈曲し、外はゆるやかに曲がる。内・外面とも横方向のヘラナデで仕上げているが、内面は特にていねいである。茶褐色を呈し、外にはススが付着している。金雲母・石英・長石・白色石などのこまかい土を用い、堅い焼きである。

12は底部付近で直線的にのびている。外面は縦方向の粗いヘラナデ、内面は横方向のていねいなヘラナデで仕上げている。外は淡茶褐色、内は黒褐色を呈し、焼成度は良い。金雲母・白色石を多く含んだ土を用いている。13・14は浅いあげ底の脚台で、脚台直径は13が6.5cm、14が9.5cmである。14は脚端を凹線が巡る。脚台内面はともに横方向ヘラナデ、内面はヘラナデであるが、外面は13が縦方向、14が横方向のヘラナデである。13は14に比べ底の厚さが薄く、脚端の一か所に3つのヘラ切りがある。色調は13が茶褐色、14が淡茶褐色で、14は外に黒斑、内にこげがある。ともに焼成度

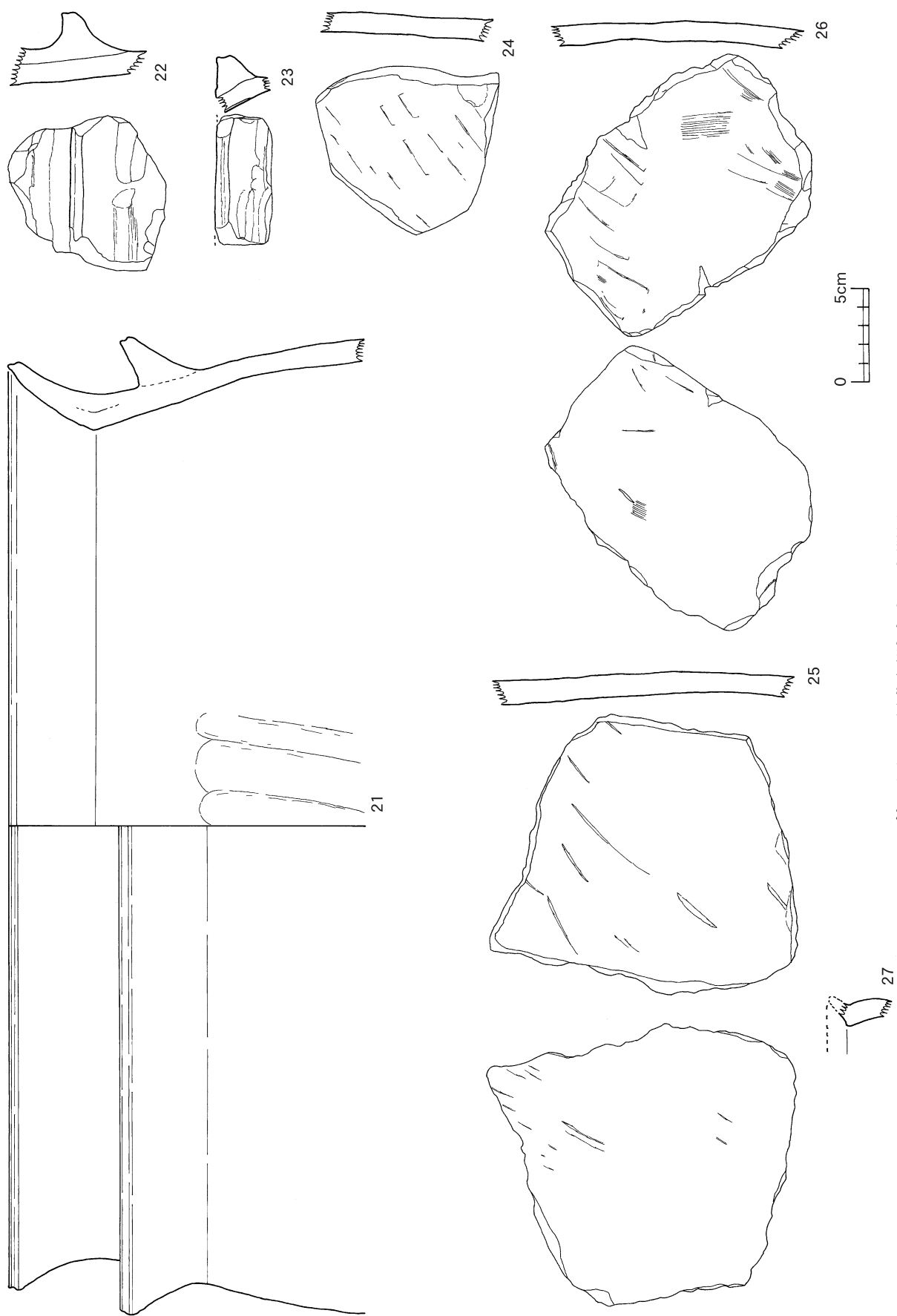


第7図 2号住居跡出土の土器(1)

は良く、胎土はともに白色石・金雲母などの細石が多いこまかい砂質土で、13には4mm大のものもある。

15～18は壺形土器である。15の口縁部は短く、口縁直径が9cmある。口唇部はへこみ、頸部直径8cmとくびれ、ゆるやかな肩部へ移る。肩部に3条の三角貼付突帯が付される。外面はヘラミガキでていねいに仕上げられている。内面の口縁部には積みあげ痕跡がみられ、ヘラナデで仕上げられる。16は肩部で、3条の三角突帯が貼り付けられる。内外とも横方向のヘラナデで仕上げるが、特に内面はていねいである。外面は黒褐色、内面は淡茶褐色をし、焼成度は良い。白色石などの細石が多いが、特に金雲母が多い。17・18は安定した平底である。調整はヘラナデで、外面が縦方向、内面が横方向であるが、18の内面はていねいである。18の底の仕上げは粗く、使用によってすれている。直径は17が4.5cm、18が10cmある。色調はともに淡茶褐色を主とするが、17の外は灰褐色、内面は黒色化している。

19・20は鉢形土器である。19は口唇部断面が矩形となり、やや内反する器形の小型鉢である。外面の口縁近くはややくぼんでおり、内外とも横方向のヘラナデで仕上げるが、内面の口縁近くと外面はミガキに近いほどていねいである。20は口縁直径16.5cm、高さ14cm、底部直径11cmの完全品である。安定した平底から外へゆるやかに広がり口縁近くで内反し、ゆるやかに外反して口縁端に至る。外面は縦あるいは斜め方向のていねいなヘラナデ、内面は横方向のヘラミガキで仕上げている。底はでこぼこしており、せんい状圧痕がある。外面は明茶褐色で、内面は黒褐色を呈し、焼成度は良好である。白色石・長石などの石粒を多く含む砂質土を用いている。



第8図 2号住居跡出土の土器(2)

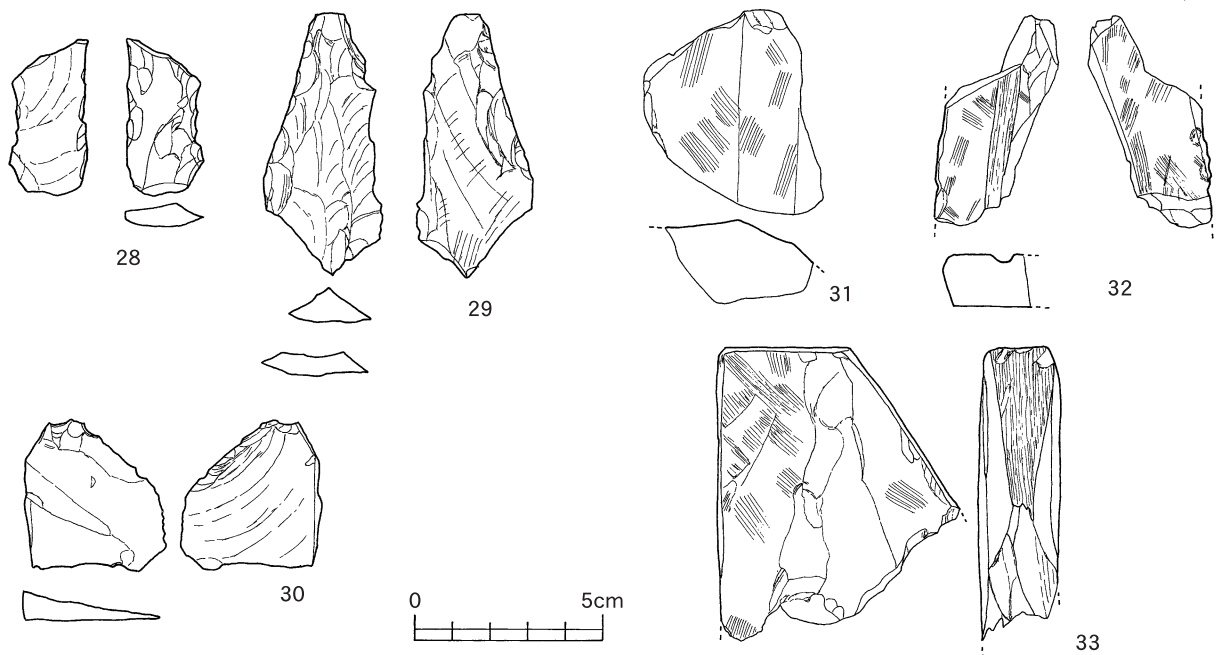
21～26は大型甕形土器で、接合はできなかったが同一個体と思われる。他にも多くの破片がある。底部は出土していない。口縁部直径が49.5cmで、内面ははっきりした稜をもつてくの字状に外反し、胴部はふくらむ。つばは頸部あたりに台形状のものが貼り付けられているが、つばの下から一気に積み上げるものと口縁部付近のみを積み上げるものとがある。口唇部はつばの部分もややくぼんでいる。外面は上部が横方向、下部が縦方向のヘラナデで仕上げ、内面は口縁部が横方向、頸部から下が縦あるいは斜方向のヘラナデで仕上げている。明茶褐色あるいは乳茶褐色・黄褐色を呈しているが、部分的には淡黒褐色を呈している。金雲母を多く含むが、白色石・黄白色石・石英などのこまかい石を含む細砂質土を使用している。焼成度は良好である。

27は土坑内で出土した甕形土器の頸部である。上部がくぼんだうすい口縁部から強く屈曲して胴部に移る。内外とも横方向のヘラナデで仕上げているが、内面はていねいに仕上げる。淡茶褐色を呈しているが、外にはススが付着している。金雲母が多くはいっているが、白色石などこまかい石や、やや大きな石も少しまざっている。焼成度は良い。

以上の土器は弥生時代中期のものである。

磨製石鏃の未製品かと思われる頁岩の剥片が7点出土している。28は縦長のもので長側辺を加工して形を整えている。片面は一部のみ加工がみられる。29の片面は自然面を広く残し、両面とも一部に加工痕がある。30は長三角形を呈する横長剥片で周辺を加工しているが、先端部が欠けている。

砥石が3点ある。32は表面の中央に溝状くぼみのある砂岩製仕上げ砥で、裏面は相当に使い込んでややくぼんでいる。長さ・幅とも不明だが、厚さは1.4cmとうすい。31は砂岩製粗砥である。厚さ2cm以上と厚い。33は五角形以上の厚さ2.2cmの粘板岩製仕上げ砥で、裏以外（裏も剥離が目立つものの一部には使用痕がみられる）の4面を使用している。表も剥離が多いが、側面は三面とも使用痕が目立つ。



第9図 2号住居跡出土の石器

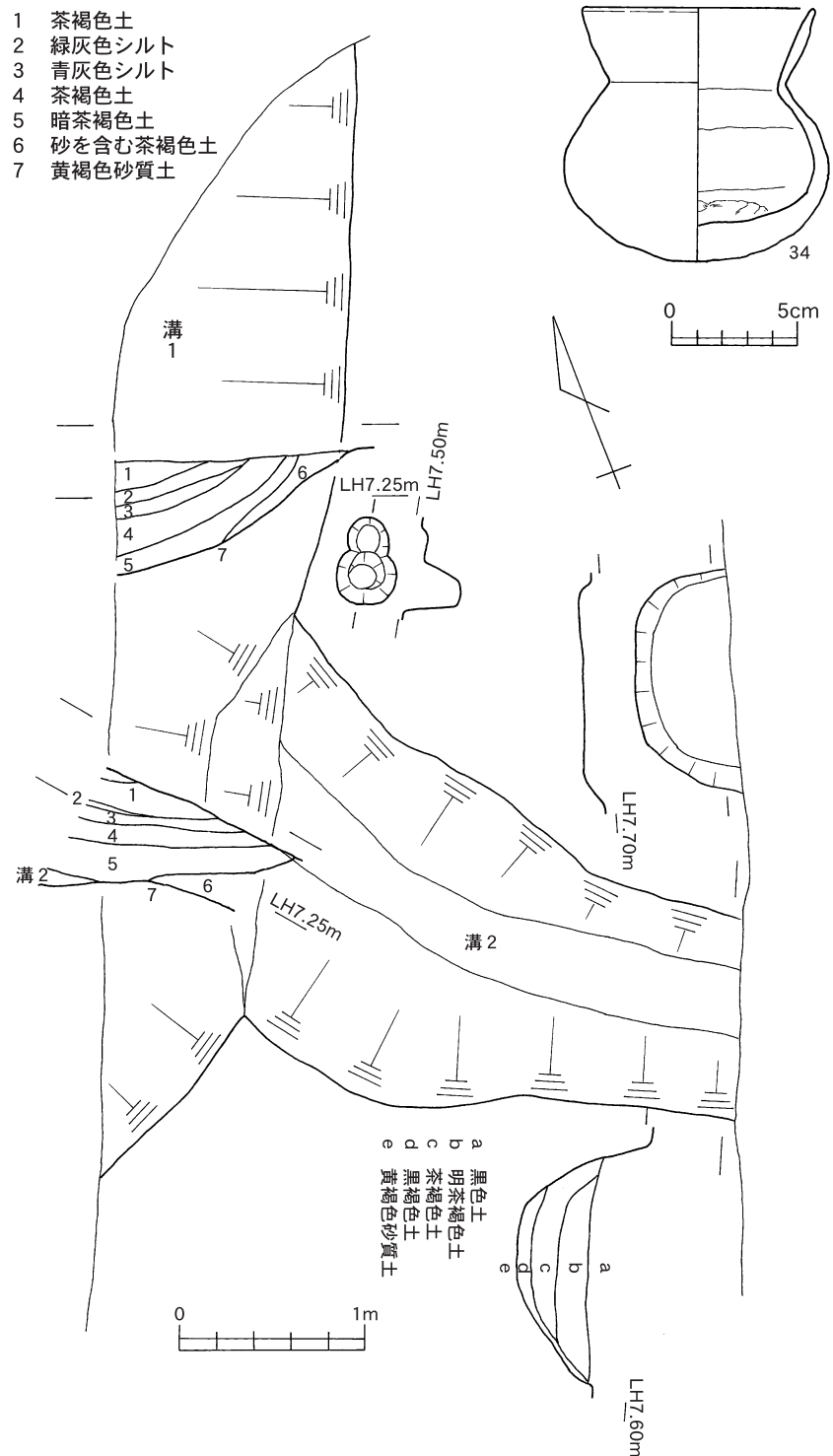
2. 溝状遺構

1) 溝状遺構 1号

南北に流れる溝であるが、東辺約6mが確認できただけで、西側が不明なため幅、深さとも不明である。黄褐色砂質土を基盤とし、埋土は5～6層に分かれる。下から暗茶褐色土よりやや明るく、黄褐色砂質土をとところどころに含むもの（6層）、暗茶褐色土（5層）、上～中位に1～2mm大の黄橙色パミスを含む茶褐色土（4層）、かなりち密な青灰色シルト（3層）、やや粘質を帯びる緑灰色シルト（2層）、所々に4～5mmの黄色パミスを含む茶褐色土（1層）となる。溝2より新しい。

2) 溝状遺構 2号

幅120～180cm、深さ70cmの溝が東西に流れており、西側を溝1号に切られている。黄褐色砂質土を基盤とし、埋土は4層に分かれる。下から黒褐色土（d層）、茶褐色土（c層）、開聞岳起源の青ゴラ（7世紀後半）と思われる火山灰状堆積物が混入した明茶褐色土（b層）、黒色土（a層）がみられる。



第10図 溝状遺構

弥生土器の壺形土器4点、成川式土器の甕形土器7点、壺形土器15点が出土している。なお検出面でも成川式土器の甕形土器1点と埴形土器1点が出土している。埴形土器（34）は口縁直径9.4cm、高さ10.2センチの完形品である。胴部は中央の張る丸底で、頸部でくびれ、口縁は外へ開きながら丸みをもっておわる。外面はヘラによるていねいなナデ、内面もヘラによる横ナデで仕上げてある。半分ほどは黒色化しているが、明茶褐色を基調とし、白色石・金雲母・石英などのこまかい

石を用い、焼成度は良好である。

3. 土坑

B区で土坑3基が検出された。他にB区で1基、C区で1基の近世土坑が検出されている。

1) 土坑1

B区の南端近くで検出された。85cm×115cmのやや南北に長い長方形の土坑で、深さが15～20cmある。埋土は茶褐色土で、土坑2より古い。須恵器(35)が1点出土している。

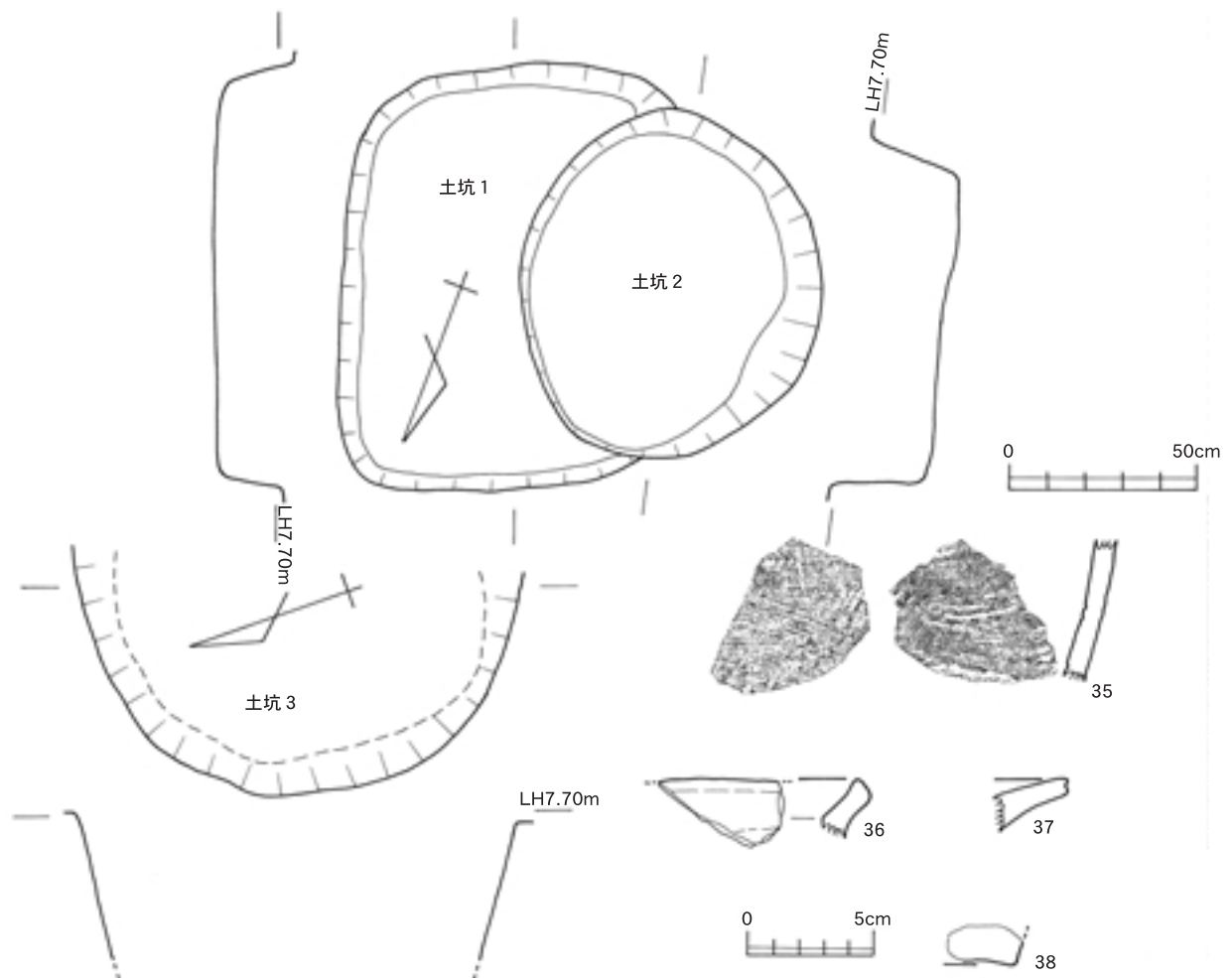
須恵器は埴瓶の胴部かと思われる。外面は格子文かと思われるタタキ痕のあとハケナデがしてあり、内面は同心円文当て具痕のあとをナデ消している。灰色を呈し、堅い。

この土坑は古代のものと思われる。

2) 土坑2

土坑1と隣接して検出された80×95cmの円形土坑で、深さが25cmある。埋土は淡茶褐色土で、土坑1より新しい。弥生土器が5点出土している。

36は内外を横方向のヘラナデで仕上げる甕形土器である。口縁内面が下がり、くの字状に近くなっているが、胴部との境の稜ははっきりし、上面がややくぼんでいる。口唇部は丸みをおびた矩形を呈している。淡茶褐色を呈している。長石・白色石などのこまかい土を用いており、焼成度は良好である。



第11図 土坑

出土している土器は中期後半のものであるが、土坑1より新しいことから、これらの土器はのちの混入品で、土坑は古代以降のものである。

3) 土坑3

中央付近で検出されたが、民家のほうに延びているため西半分しか調査できていない。直径120cmほどの円形土坑と思われる。埋土は茶褐色土で、深さは湧水によって下面が調査不能のためはつきりしない。弥生土器が7点出土している。

37は幅の広い口縁部をもつ甕形土器で、口唇部には一条の凹線がみられる。内外ともヘラによる横ナデで仕上げている。38はややあげ底となる甕形土器の底である。外面はヘラによる縦ナデで仕上げ、底の調整は粗い。ともに淡茶褐色を呈し、金雲母・白色石・石英・茶色石などのこまかい石を用い、37の焼成度は良いが、38のほうは普通である。ともに中期後半のものである。

出土している土器は弥生土器だが、小破片のため土坑の年代は不明である。

4. 柱穴

B区で24個、C区で8個の柱穴が検出されたが、建物としてまとまるものはない。直径15～30cm、深さ15～50cmほどのものが多いが、40cm×80cmのだ円形のものや、直径50cmと大きいものもある。埋土は茶褐色土のものと黒色土のものがある。

これらは埋土・出土品の状況から近世以降のものと思われる。

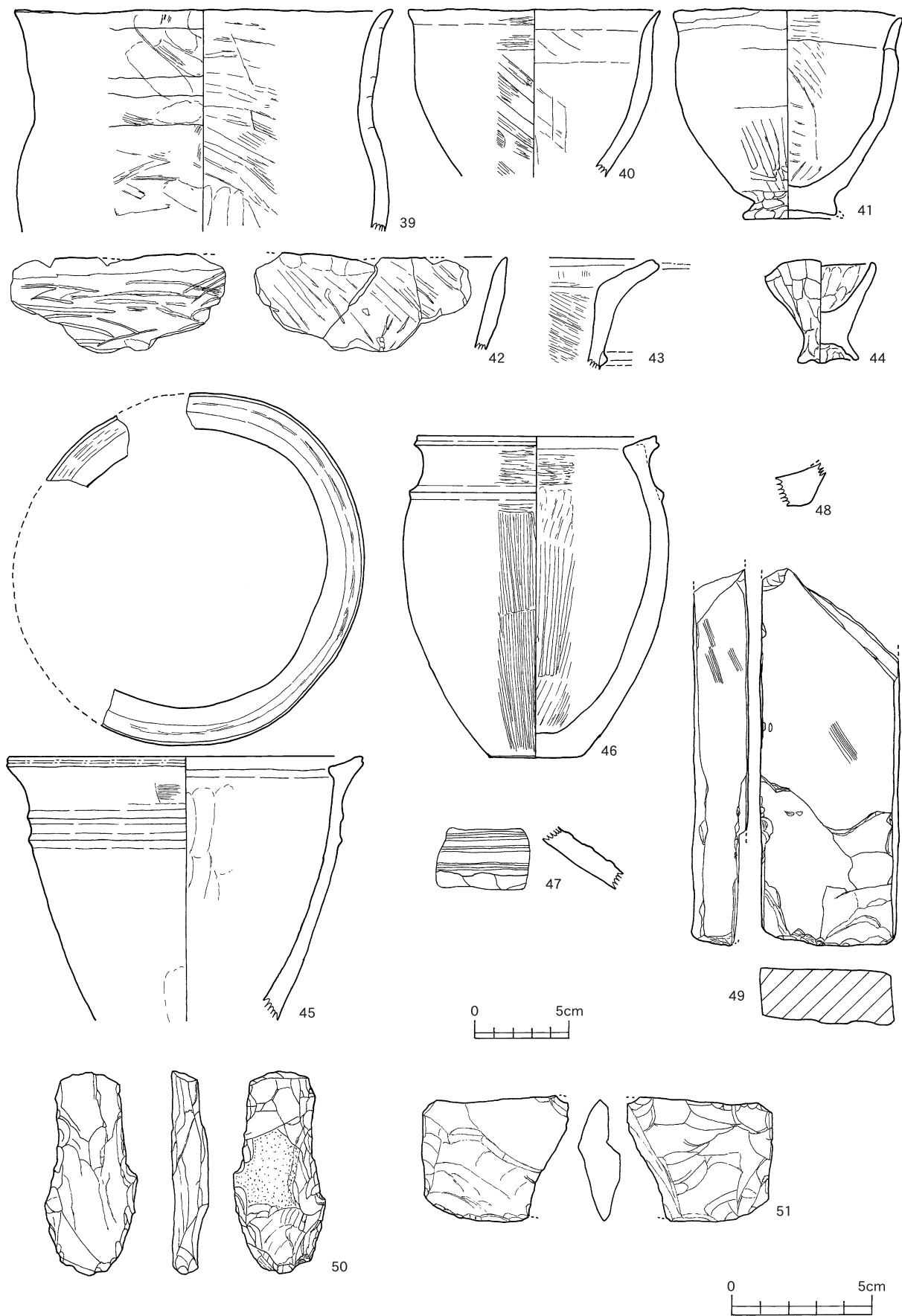
5. 土器溜まり

D区の北側に土器溜まりがあり、成川式土器9点と、弥生土器28点、砥石1点、磨製石鏃の未製品1点、石庖丁の未製品1点が出土した。

39～42・44が成川式土器である。39～42は甕形土器である。39は口縁直径20cmのくの字状口縁となるもので丸底になるものと思われる。端部は細くなっておわり、波状となる。外面は輪積み痕を残すほど粗いヘラ調整で、横あるいは縦・右下がりの向きとなり、でこぼことなっている。内面は上が横あるいは斜め方向のヘラナデ、胴部下方がヘラによる縦ナデである。作りは雑ででこぼこしているが、くり返し調整している。茶褐色をし、外にはススが付着している。焼成度は良好で、金雲母・白色石・石英などのこまかい石を用いている。40は口縁直径13.2cmと小型のものでくの字状に外反する口縁となり、端部は細くなり波状を呈している。外面は右下がり斜め方向のヘラナデで粗いようであるが、くり返しやっているためミガキのようにもみえる。内面も斜め方向のヘラナデで仕上げる。底近くはあれている。外は茶褐色、内は暗茶褐色を呈するが、黒褐色となる部分もある。雲母・白色石・長石などを多く含む砂質土を用い、4mm大の小石もある。焼成度は良好である。

41はさらに小さく口縁直径12cm、高さ11cmの浅い脚台付きの完形品である。くの字状となる口縁で端部は細くなる。外面はミガキに近いといねいなヘラナデで仕上げているが、粘土の積み上げ痕が残るほどのでこぼこも目立ち、脚台とのつなぎ部分は手づくね風の粗いつくりである。内面は横方向のヘラナデで仕上げるが、輪積み痕跡も目立つ。脚台内面は粗いヘラナデで、脚台はあげ底風と浅い。淡茶褐色を呈し、焼成度は良好である。胎土は40と同様である。

42も口縁端が細くなるもので、外面は沈線風にみえるほど粗いヘラ横ナデ、内は斜め方向のヘラナデで仕上げる。部分的には白っぽいが、明茶褐色を呈し、焼成度は良い。こまかい黄白色石・石英などを含む砂質土を用いている。44は口縁直径6cm、高さ5.5cmの甕形をした手づくね土器であ



第12図 土器溜まり出土の遺物

る。乳茶褐色を呈し、焼成度は良い。黄白色石・石英などを含む砂質土である。

これらは古墳時代前期のものである。

43・45～48は弥生土器である。

43・45・46は甕形土器である。43はくの字状口縁に近く、口唇部はくぼんでいる。内面は稜をもって曲がるが、外はゆるやかに曲がり、頸部下部に三角突帯が貼付けられる。外面および胴部内面は横方向のヘラナデ、口縁内面は縦方向ヘラナデで仕上げている。淡茶褐色を呈しているが、外はススが付着している。黄白色石・金雲母・石英・白色石などの多い細砂質の胎土を用い、焼成度は良い。

45は口縁直径が18～19cmとややいびつな形をした口縁部をもつ。逆L字状に近いが、内面がやや下がり短い鋤先状になる。口唇部は凹線状にくぼんでおり、肩部には2条の三角突帯が付される。外面上部と内面口縁部は横方向のヘラナデ、外面下部と内面は縦方向ヘラナデで仕上げている。外面は乳茶褐色、内面は紫がかった淡茶褐色を呈し、外にはススが付着している。白黄色石・白色石・石英などの細石を含むこまかい土を用い、焼成度は良い。

46は口縁直径12.5cm、高さ17cm、底部直径5cmの甕形土器である。内部が内傾する口縁部で、口唇部はくぼみ、肩部に一条の三角突帯が貼り付けられる。調整は内外ともていねいで、外面は突帯の上が横方向ヘラミガキ、下が縦方向ヘラミガキである。内面も上が横方向、下が縦方向のヘラミガキである。口縁の肥厚部・突帯は貼り付けである。茶褐色を呈するが、外はやや黒っぽく、焼成度は良好である。白色石などこまかい土を用いている。

47・48は壺形土器である。47は3条以上の低い台形状貼付突帯が付された肩部である。48は小型壺形土器の底部で、底はすれて砂粒が露呈している。ともに茶褐色（芯は灰あるいは黒褐色）を呈し、焼成度は良い。

49は長さ20cm、幅7.4cm、厚さ3cmの直方体をした頁岩製の仕上げ砥石である。表面下部は剥脱しており、上部は折れている。裏面はでこぼこしたままであるが、両側面も使った三面砥石である。表面にこまかい擦痕がみられる。50は長さ7.3cm、幅3.3cm、厚さ1.4cmの磨製石鏃の未製品と思われるものである。上部は折損しており、片面には自然面が残っている。分厚い剥片の長側辺にこまかい加工をして形を整えている。51は横長の剥片で折れている。縦4.5cm、横5.2(+α)cm、厚さ1.5cmで、周辺をこまかく加工し形を整えている。石庖丁としては狭い気もするが、製品とは考えにくいため、とりあえず石庖丁の未製品としておく。50・51とも頁岩である。

第2節 遺物

遺構以外から出土したものには弥生土器・成川式土器・土師器・須恵器・陶磁器・土製品・石製品がある。

1. 弥生土器

弥生土器には甕形土器・大型甕形土器・壺形土器がある。

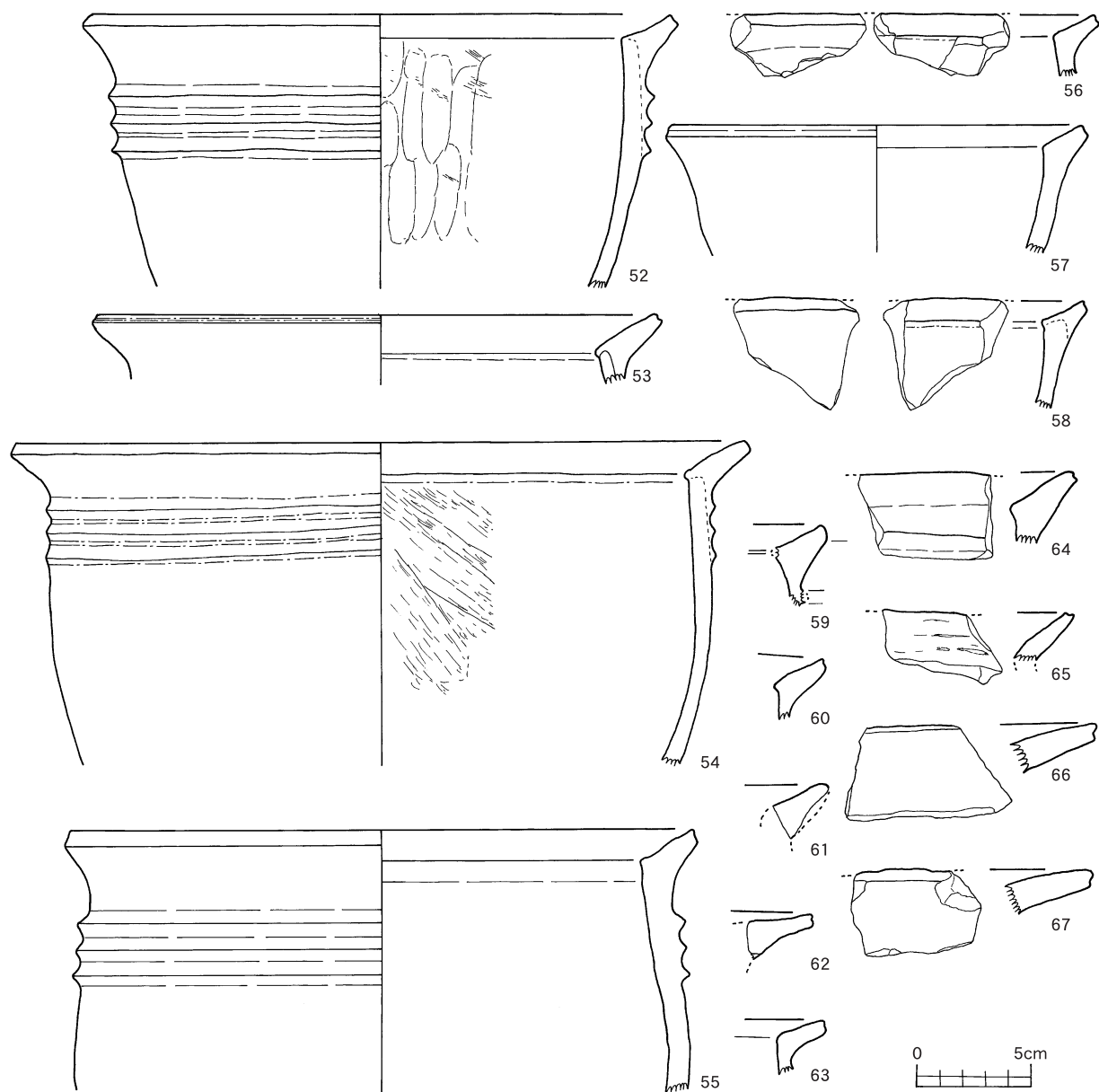
1) 甕形土器 (52～78)

甕形土器の口縁部は内面がやや下がり、胴部・肩部に突帯のあるものである。内面が下がることは共通するものの、逆L字状に近いもの、鋤先状に近くなるもの、くの字状に近いものとがある。

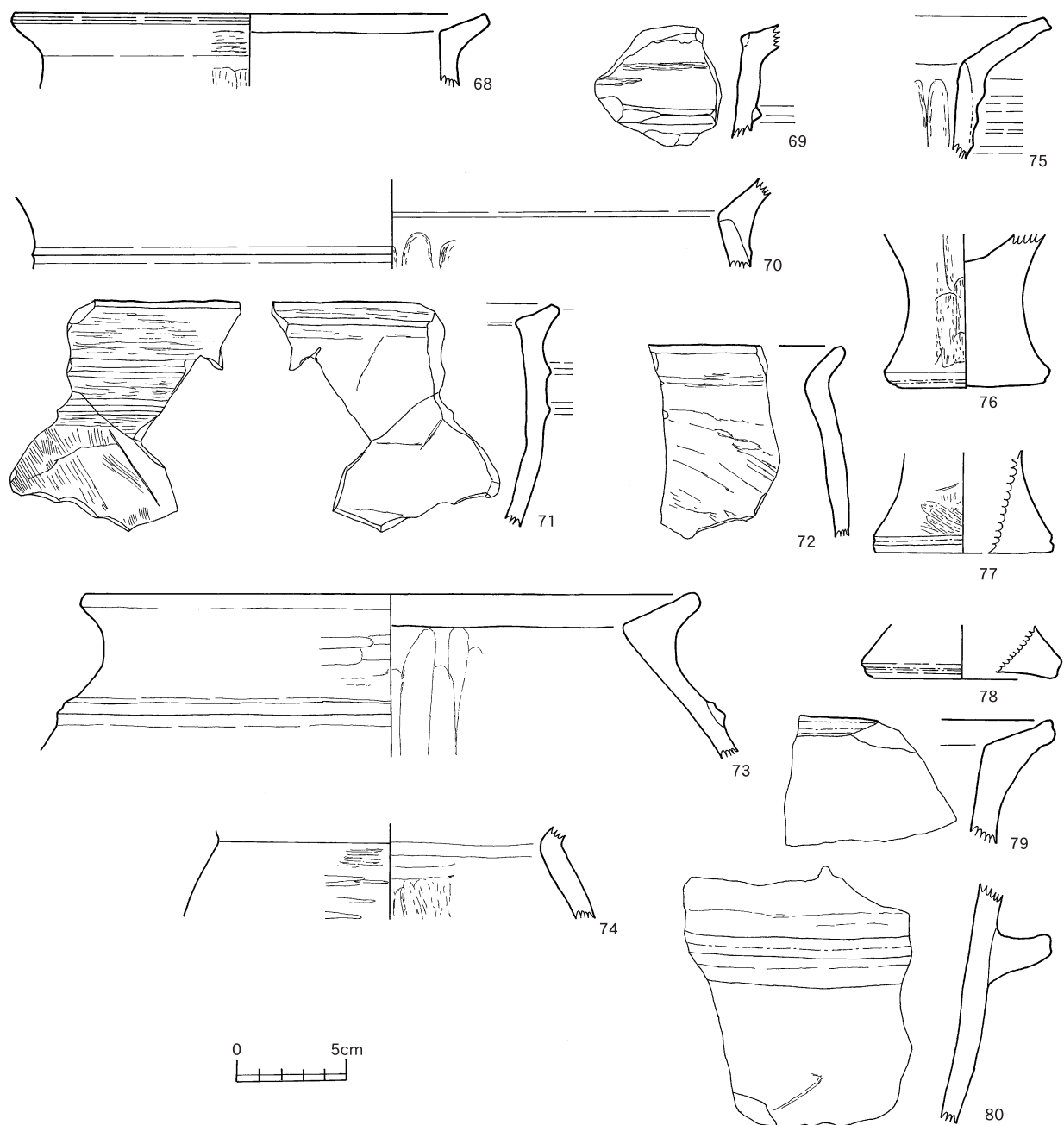
52は直径が26cmで、口縁内面がややくぼみ、肩部に3条の三角突帯が貼り付けられている。53は直径が25cmで、口縁部は貼り付けられ、口唇部がくぼむ長い矩形を呈す。54は直径が33cmで、口縁内面はやや内側へ張り出し、上へふくらんでいる。肩部に3条の三角突帯が貼り付けられるが、52と同様に口縁とともに貼り付けられる。55の口縁はやや太めのもので直径が28cmある。3条の三角突帯がある。57は直径18cmと小形で、突帯が付けられない。68も直径22cmと小さく、口縁は矩形を呈する。72は内面の稜がゆるやかな口縁で、筒状の器形を呈している。73は直径28.5cmの丸みをもった口縁をしており、胴部が外へ大きくふくらんでいる。肩部には上がくぼんだ方形突帯が貼り付けられている。75は口縁部が長い。脚部は端部に一条の凹線のある直径8～9cmの充実脚台で、78は浅いあげ底となる。

2) 大型甕形土器 (79・80)

逆L字状に近い口縁で、二重口縁となる。やや細長い断面が矩形となるつばが貼り付けられる。



第13図 弥生土器(1)

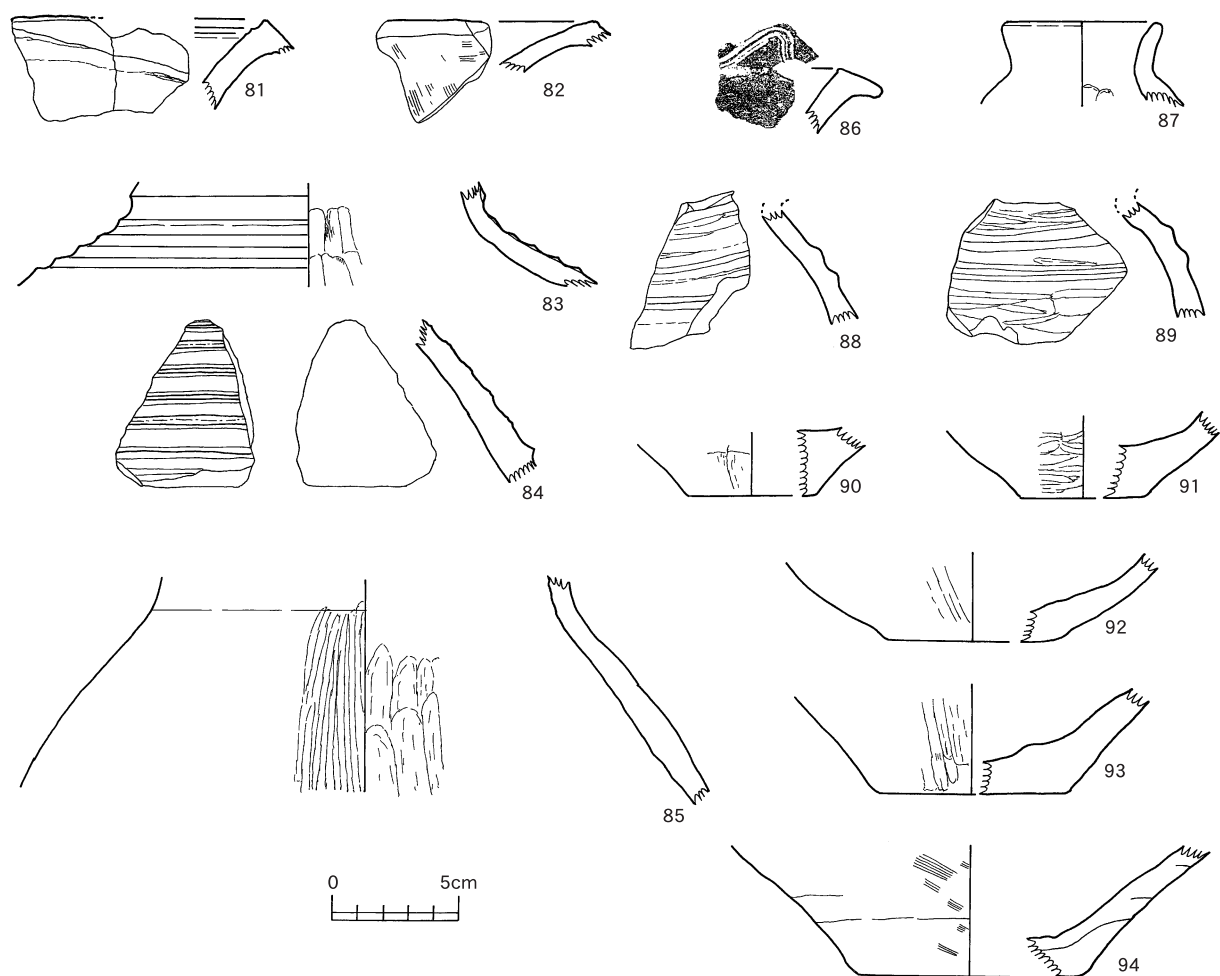


第14図 弥生土器(2)

口縁とともに口唇部はややくぼむ。内外とも横方向のヘラナデで仕上げている。淡茶褐色を呈し、焼成度は良い。金雲母・黄白色石・白色石などのこまかい石を含む土を用いている。

3) 壺形土器 (81～94)

広い口縁のもの (81～86) と、小さい口縁のもの (87～89) とがある。口縁は内側へもややのびるが外へ広くのびる。81の内面には中央のくぼんだ台形状の突帯があり、86の口唇部には3条の櫛歯による波状沈線が描かれる。頸部あるいは肩部には三角状突帯が付されるもの (83) と、台形突帯のあるもの (84)、突帯のないもの (85) とがある。83は頸部から肩部にかけて6条の、84は肩部に6条の突帯がある。87は口縁直径が6.5cmと小さく、88・89は丸みをおびた肩部で、2条の丸みをおびた三角突帯が貼り付けられる。これらは頸部がくびれる。底部は小さい平底で、胴部へ広



第15図 弥生土器(3)

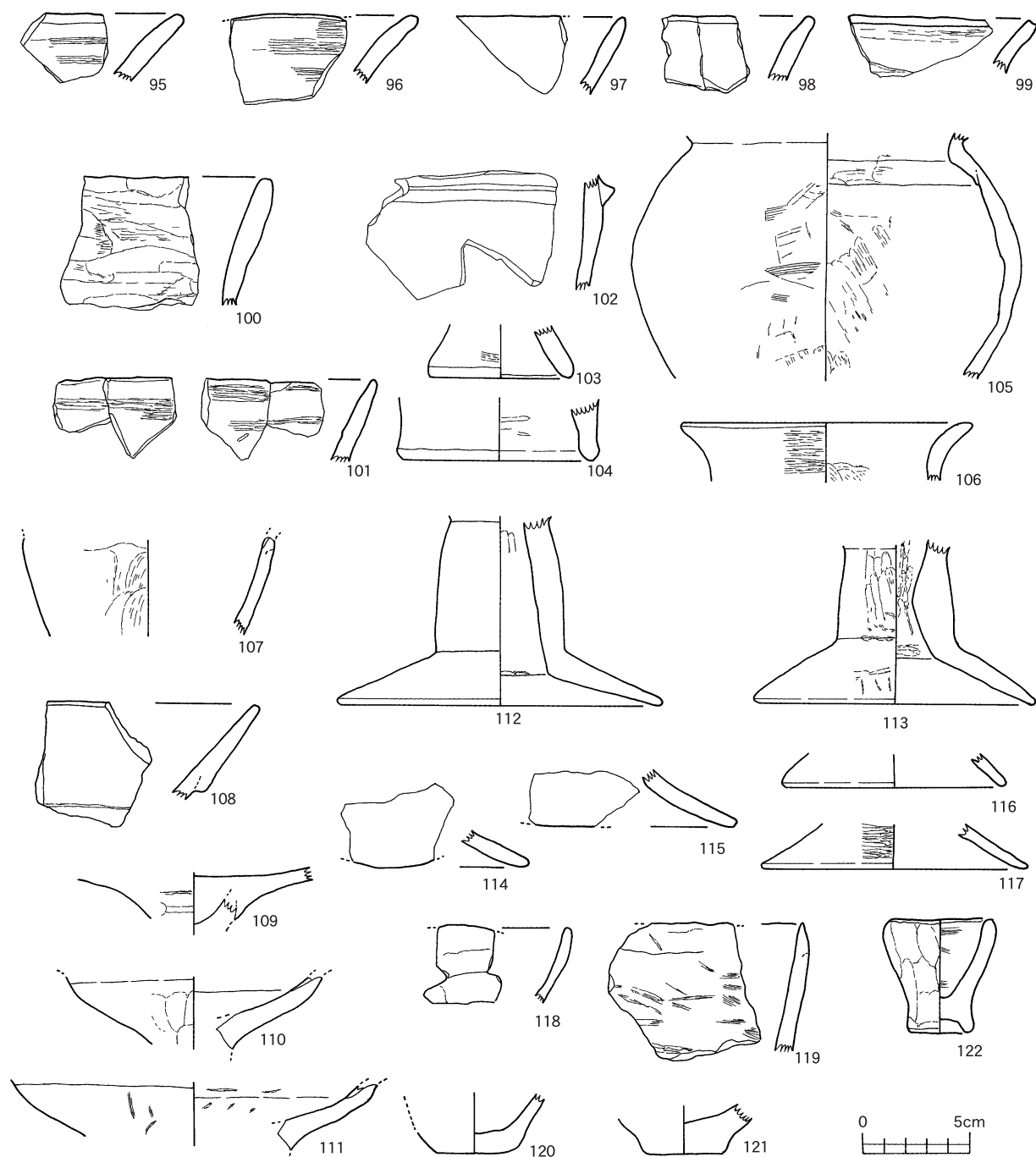
がっている。底部直径は5 cmの小さいものから9 cmの大きなものまでである。外面・内面とも調整は縦あるいは横方向のヘラナデで仕上げているが、ミガキ仕上げ、あるいはミガキに近いいねいなナデ仕上げもみられる。底のつくりは91のように雑なものもあり、94は3 mm大ほどの小石を多く含む粗い土を用い、表面の剥脱も目立つ。94は積み上げ痕も外にみられる。

2. 成川式土器

器種として甕形土器・壺形土器・埴形土器・高坏形土器・鉢形土器・手づくね土器がある。

甕形土器には外反する口縁部に脚台が付く形態（95～99・101～104）と、外反する口縁で丸底のもの（100・105）とがある。口縁部は外へ強く反るものと、やや直に近くなって外へ開くものとがある。口唇部は丸みをもっているものがほとんどだが、99は矩形を呈し、くぼんでいる。外面はヘラによるいねいな横ナデで仕上げており、内面も同様である。淡茶褐色・茶褐色・乳茶褐色を呈し、外にはススの付着したものが多い。金雲母・長石・黄白色石などを含むこまかい土を用いており、焼成度は良好である。頸部にいねいにナデた三角突帯が貼り付けられている。胴部内面のヘラナデは縦方向になる。脚台は直径が6.8 cmと小さく、ハの字に開くもの（103）と、9.5 cmで直立ぎみのもの（104）とがある。端部は両方からナデてやや尖っている。内外ともヘラによる横方向のナデ仕上げである。色調などは口縁部と同じである。

丸底となるものの口縁部(100)は外へ開き、頸部で外へ強く屈曲している。内外ともヘラによる横ナデで仕上げているが、粗い仕上げである。胴部(105)は外面がヘラによる横方向を主体としたナデ仕上げで、ミガキに近いほどくり返しナデているが、でこぼこが目立つ。内面は縦方向のヘラケズリであるが、でこぼこが目立つ。内面の頸部近くにつぎ目痕が残っている。淡(あるいは明)茶褐色を呈しているが、胴部の外面の一部は赤あるいは黒っぽい部分があり、ススも付着している。内面は灰白色を呈する。長石・石英・黄白色石・金雲母などのこまかい石を多く含むが、やや粗い土である。焼成度は良好である。



第16図 古墳時代の土器

壺形土器の口縁部（106）は直径が13.5cmあり、外へ強く反っている。外面はヘラによる横ナデであるが、内面は口縁部がヘラによる横ナデで、頸部近くは縦方向のヘラケズリとなる。

107は埴形土器の口縁部で、口縁部は2段につながるものである。口縁端へは粘土を内からかぶす方法をとっており、直径が12cmほどと大きめである。外面にはつぎ目が残っており、縦方向のヘラナデで仕上げている。内面は横方向のヘラナデである。こまかい土を用いて焼成度は良い。

高坏形土器の坏部（108～111）は底部と口縁部をつないでいるが、口縁部を内から重ねるものと、外から重ねるものがある。口縁端部は丸みをおびておわり、口縁部と端部の境はくぼみとなる。坏部と脚部はつながりとなるが、芯の部分に団子状の魂をいれている。脚部（112～117）は中央がややふくらむ筒部とハの字状に広がる裾部からなる。筒部はどっしりとした感じで、特に113は内側にもふくらみ太いつくりとなる。筒部と裾部は112は内外ともはっきりした稜をもつが、113はゆるやかである。裾部端は丸くおわるが、細みがかったものもある。脚端部の直径は10.5cm～15cmある。外面はヘラによるていねいな横ナデを主とするが、110・113は縦方向のナデもみられ、ミガキに近いていねいなナデもある。内面も同様にヘラによるていねいな横ナデが主となるが、109・111はヘラミガキである。淡茶褐色・茶褐色・黄みがかった淡茶褐色・灰白色などを呈しているが、108～110の内面は黒褐色をしている。茶色石・石英・白黄色石・金雲母などの石が多いこまかい土を用いている。焼成度は良好である。

鉢形土器（118～121）はやや内反するものと、外へ開く大型のものがあるが、ともにつくりは粗い。118は内反する小型のもので端部は矩形となる。内外ともヘラによる横ナデだが、内は特にていねいである。119の口縁はでこぼこしており、外面のヘラナデも粗く、つぎ目痕が残っている。内面は右下がりとなるていねいなヘラナデである。120は不定形な形をした平底の小型鉢で、形は雑だが内外ともていねいなヘラナデで仕上げている。121も平底であるが、底は不定形で直径が4cm前後ある。底から直に近く立ち上がり、そこから外へ開いている。内外ともヘラナデである。

手づくね土器（122）は脚台付甕の形をしており、口縁直径5cm、高さ5.3cm、脚台直径3cmである。内面は繊維状ハケによる横方向のナデで仕上げている。黄白色石・石英・赤色石などの小石を多く含む砂質土を用いている。

3. 古代以降の土器

古代・中世・近世の土器が少量ずつ出土している。

古代の土師器坏1点と須恵器3点が表採されている。123は台形の高台が付された須恵器坏である。高台直径は7.8cmあり、底部は厚い。うすい灰褐色を呈しているが、外面には部分的に自然釉がかかっている。こまかい土を用い、堅い。124は提瓶かと思われる須恵器の破片で、同一個体かと思われるものが土坑1（35）で出土している。内面は同心円文の当て具、外面は条痕タタキのあとを横方向にていねいに櫛状施文具でナデている。灰褐色を呈し、堅致である。

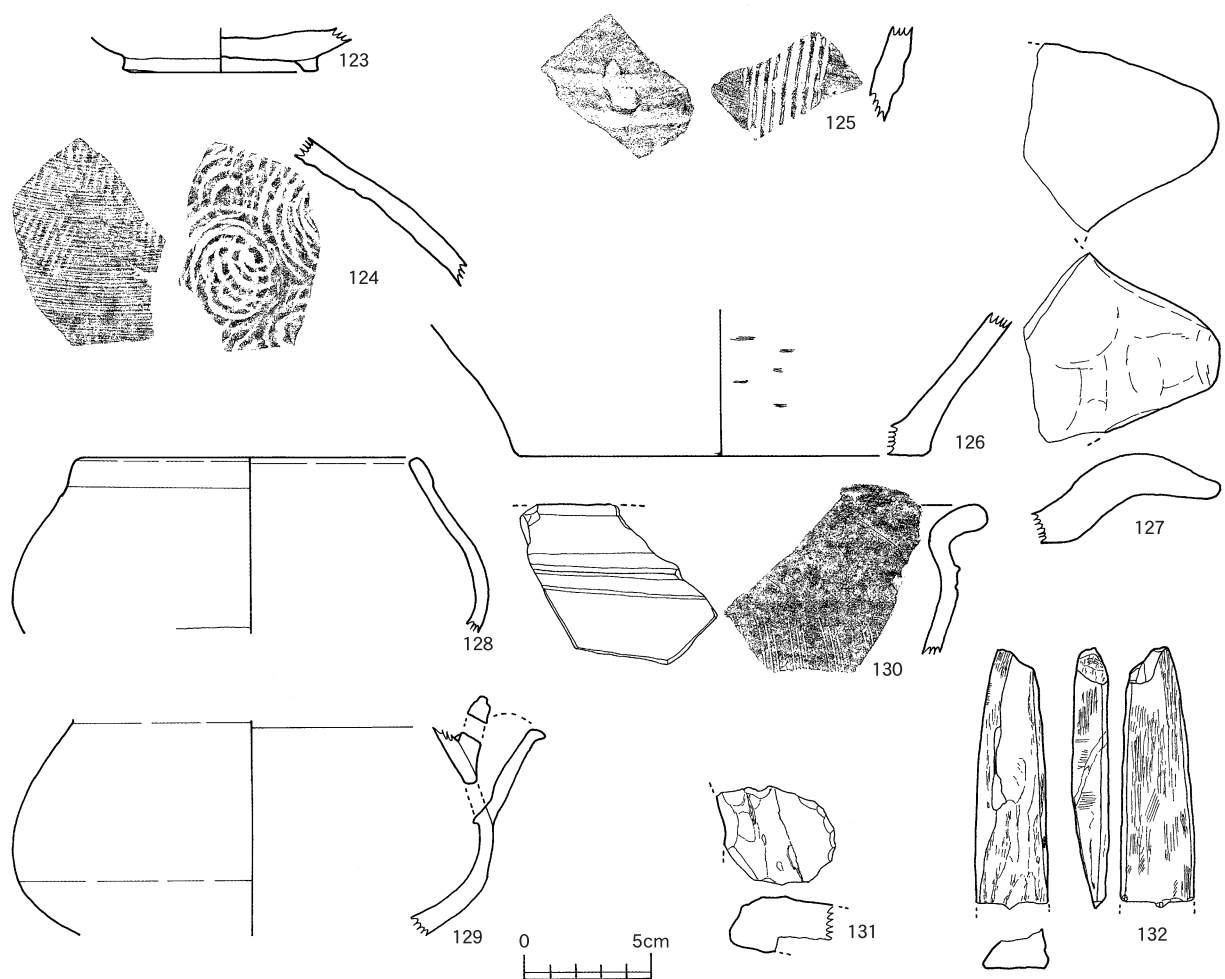
中世の備前焼（甕1点・搦鉢2点）、常滑焼甕2点、陶器2点、土師器6点がC区で多く出土している。図化したもののうち125・126は表採品、127はD区の茶褐色上層出土である。125は紫がかった淡茶褐色をした陶器の搦鉢で、かき目が端近くであることから口縁部に近い部分だと思われる。外面には3条の横方向凹線があり、一か所にヘラ押し痕がみられる。内面は横方向のヘラナデのあと下から上への9条のかき目がある。126は茶色っぽい黄褐色を呈した陶器壺である。安定し

た平底の直径は16.5cmと大きく、外へまっすぐ広がって立ち上がる。調整はヘラナデで、外面が縦方向、内面が横方向である。白色石・石英などのこまかい石が多いが、5mm大の小石も含まれている。127は土師製の土鍋把手である。内外とも粗くナデている。乳茶褐色を呈し、外にはススが付着している。長石などのこまかい土を用い、軟質の焼きである。

37点の近世・近代陶磁器も採集されている。碗・壺・甕・搗鉢・茶花・瓦などがある。128・129は同一個体である。薩摩焼の茶花で口唇部と胴下部を除く部分に胡摩のはいった灰緑色釉がかかっている。外はていねいにハケナデで仕上げているが、内側はでこぼこになっている。口縁部の直径は14cm、胴部の直径は19cmある。口縁部はかまぼこ状に肥厚している。注ぎ口は単孔で、口径2cm位あり、端が下へ垂れている。注ぎ口にくっつくようにして上部は丸みをおびた把手があり、径1cm足らずの孔があいている。露胎となった下部にはススが付いている。130は緑がかった鉛釉のかかった薩摩焼の搗鉢で、口縁部内面が一部露胎となっている。外面に一条の三角突帯があり、その下に細い凹線が巡っている。かき目は7条で細い。白色石・石英などの多い砂質土を用いている。これは18世紀中頃のものと思われる。

4. 土製品 (131)

ふいごの羽口が表採されている。端部にはスラグが付着し、外面は強い熱により灰褐色を呈して



第17図 古代以降の土器・土製品・石製品

いる。白色石・雲母などのこまかい石を含んだ胎土である。

5. 石製品 (132)

舟形を呈した六角柱砥石がB区上層で出土している。粘板岩製の仕上げ砥石で下部を欠損している。上部は使用前の破損である。幅広2面のうちの片面は表面の剥脱が目立つが、あと一面は長軸中央がややくぼんでいる。縦方向の使用痕が目立つが一部は横方向にもなっている。

第2表 土器観察表(1)

図番	出土地	種類	器種	口径	高さ	底径	外面の調整	内面の調整	色 調	焼成度	胎 土
52	D区	弥生土器	甕	26cm			ヘラ横ナデ ヘラたてナデ	ヘラ横ナデ	暗茶褐色	良好	金雲母・白色石多し
53	D区	弥生土器	甕	25cm			ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	黄茶褐色 (外にスス)	良好	金雲母の多いこまかい石 石英・茶色石
54	D区	弥生土器	甕	33cm			ていねいなヘラナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	金雲母多 石英・白色石粒など
55	D区	弥生土器	甕	28cm			ヘラ横ナデ ヘラたてナデ	ていねいなヘラ横ナデ	外：黒褐色 内：淡茶褐色	良好	金雲母多 白色石・石英なども多い
56	D区	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	金雲母多 石英・白色石の多いこまかい土
57	D区	弥生土器	甕	18cm			ヘラ横あるいは斜方向ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐 (内は灰がかかり外はススで黒色化)	良好	金雲母多く黄白色・長石など含む砂質土
58	表採	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ ヘラたてナデ	茶褐色 (内にごった茶褐色)	良好	金雲母・白色石・黄色石など砂粒の多い土
59	D区	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	金雲母多 白色石などこまかい石
60	D区	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐 (外はスス)	良好	金雲母多・白色石
61	B区	弥生土器	甕				不明	不明	黄色っぽい明茶褐	普通	金雲母多・白色石
62	D区	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	不明	茶褐色	普通	金雲母多 白色石などのこまかい石
63	D区	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラナデ	灰がかった淡茶褐 (外にスス)	良好	金雲母多 黄白色石・白色石の多い砂質土
64	D区	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄っぽい淡茶褐色	良好	金雲母多 白色石・石英・茶色石
65	D区	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	金雲母多 白色石・石英などこまかい石
66	D区	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色 (外はススのため黒い)	普通	黄白色石・金雲母などのこまかい土
67	B区	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	金雲母・長石・白色石多
68	D区	弥生土器	甕	22cm			ヘラ横ナデ ヘラたてナデ	ていねいなヘラ横ナデ	黄みがかった淡茶褐色 (外は灰色がかっている)	良好	金雲母多・長石・白色石・茶色石などを含む砂質土
69	D区	弥生土器	甕				ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	内：淡茶褐色 灰褐 (外に黒班アリ)	良好	金雲母多・白色石・石英などのこまかい砂
70	D区	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	暗茶褐 (外にスス)	良好	金雲母・白色石・白黄色石などこまかい石
71	D区	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	白色石などこまかい石
72	D区	弥生土器	甕				ミガキに近いヘラナデ	ヘラ横ナデ	内：淡茶褐色 外：茶褐色	良好	石英・白色石などの砂粒多
73	B区	弥生土器	甕	28.5cm			ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄みがかった淡茶褐色	良好	金雲母多 白色石・黄色石・石英などこまかい石
74	D区	弥生土器	甕				ヘラ横ミガキ	ヘラ横ナデ	茶褐色 (外に黒班)	良好	白色石・金雲母多こまかい石粒
75	D区	弥生土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	金雲母・白色石多 黄白色石・石英などのこまかい石粒
76	D区	弥生土器	甕			7.5cm	ていねいなヘラたてナデ	ヘラたてナデ	黄茶褐色	良好	白色石・金雲母・石英などのこまかい石
77	D区	弥生土器	甕			8.3cm	ていねいなヘラナデ	不明	灰色がかった淡茶褐色 内は茶褐色	良好	石英・白色石5mm大の石も多く含む砂質土
78	B区	弥生土器	甕			9.2cm	ヘラ横ナデ	横ナデ	灰色がかった淡茶褐色	良好	金雲母多 白色石・石英など含む砂質土
79	D区	弥生土器	大甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	金雲母・黄白色石・白色石
80	D区	弥生土器	大甕				ていねいな横ナデ まめつあり	ヘラたてナデ	明茶褐色	軟質	金雲母・茶色石・白色石など大きめの石含む (1.2cmほどの石もある。)
81	D区	弥生土器	壺				ヘラ横ナデ	ミガキに近いていねいな横ナデ	茶褐色	良好	金雲母・石英などこまかい石粒の多い砂質土
82	D区	弥生土器	壺				ヘラたてナデ	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	金雲母多こまかい石
83	D区	弥生土器	壺				ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色 (外はやや黒っぽい)	良好	金雲母多 白色石も多い細石粒
84	D区	弥生土器	壺				ミガキに近いていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	外：茶褐(スス付着) 内：灰褐色	良好	白色石・黄色石・金雲母多い長石などのこまかい石

第3表 土器観察表(2)

図番	出土地	種類	器種	口径	高さ	底径	外面の調整	内面の調整	色 調	焼成度	胎 土
85	D区	弥生土器	大型壺				ヘラたてミガキ	ヘラたてナデ	淡茶褐色(内黒褐色)	良好	金雲母多・白色石の多い砂質土
86	D区	弥生土器	壺				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	良好	金雲母多・白色石などの細かい石
87	D区	弥生土器	壺	6.5cm			ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	茶褐色	良好	白色石・赤色石・金雲母などの細砂粒
88	D区	弥生土器	壺				ヘラ横ミガキ	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	金雲母多・茶石・白色石などの細かい石粒
89	D区	弥生土器	壺				ヘラ横ミガキ	ていねいなヘラナデ	茶褐色・淡茶褐色 多くは黒色化(光沢アリ)	良好	茶色石・白色石・石英・金雲母などの細かい石
90	D区	弥生土器	壺				ヘラたてナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色 外黒褐色	良好	金雲母多, 白色石・石英などの細石
91	D区	弥生土器	壺			5.0cm	ヘラ横ミガキ	ヘラミガキ	茶褐色	良好	金雲母多・白色石・茶色石・白黄色石
92	D区	弥生土器	壺			6.5cm	ヘラたてミガキ	ていねいなタテナデ	茶褐色 淡茶褐色	良好	金雲母多, 白色石・黄色石のこまかい石のある砂質土
93	D区	弥生土器	壺			7.5cm	ていねいなヘラナデ(ミガキに近い)	ヘラナデ	茶褐色 黒褐色部分が広い	良好	金雲母・白色石などの細石
94	排土	弥生土器	壺			9.0cm	繊維状ハケナデ	ヘラ横ナデ	内: 黒褐色 外: ピンクがかった淡茶褐	良好	石英・長石もあるが茶色石など径3mm前後の小石を多く含む
95	D区	成川式土器	甕				ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	金雲母・長石などこまかい石
96	D区	成川式土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	内: 明茶褐色 外: 乳茶褐色	普通	こまかい白色石・金雲母などの細石を含む
97	D区	成川式土器	甕				ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラ横ナデ	乳茶褐(内外スス)	良好	石英・白色石のこまかい石多
98	D区	成川式土器	甕				ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐(外にスス)	良好	金雲母・長石 黄白色石
99	D区	成川式土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	良好	長石・金雲母などこまかい石粒 白色石
100	D区	土 師 器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	黄白色石・金雲母の多い あらい土
101	D区	成川式土器	甕				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	金雲母多こまかい石
102	排土	成川式土器	甕				ヘラナデ	ヘラたてナデ	内: 茶褐色 外: スス付着の黒色化	普通	金雲母多い。石英・白色石など5mm大の赤色石粒含む砂質土
103	D区	成川式土器	甕			6.8cm	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良好	金雲母多 黄白色石などのこまかい石粒
104	D区	成川式土器	甕			9.5cm	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	良好	長石こまかい砂粒
105	C区	土 師 器	甕				ヘラナデ	ヘラケズリ	内: 灰白色 外: 明茶褐色	良好	長石・石英
106	B区	成川式土器	壺	13.5cm			ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ ヘラケズリ?	茶褐色	良好	長石・白色石などのこまかい石
107	排土	成川式土器	埴				たてナデ	横ナデ	淡茶褐(外に黒班)	良好	金雲母多 白色石などのこまかい石
108	排土	成川式土器	高坏				ていねいなヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色(内は黒色)	良好	茶色石・石英・黄白色石のこまかい石
109	D区	成川式土器	高坏				ヘラナデ	ヘラミガキ	淡茶褐色 黒褐色	良好	石英・白黄色石などこまかい土
110	排土	成川式土器	高坏				ていねいなヘラたてナデ	ていねいなヘラ横ナデ	灰がかかった淡茶褐色(内部は黒色)	良好	白色石・石英, 金雲母の多いこまかい砂質土
111	排土	成川式土器	高坏				みがきに近いていねいなナデ	ヘラみがき	黄褐色	良好	金雲母・白色石の多い砂質土
112	D区	成川式土器	高坏			15cm	ていねいな横ナデ	横ナデ ていねいな横ナデ	黄茶褐色	良好	白色石・雲母・長石のこまかい土
113	D区	成川式土器	高坏			13cm	たてナデ, ミガキに近い横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	良好	金雲母・石英・白色石の多いこまかい土
114	D区	成川式土器	高坏				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	乳茶褐色	普通	金雲母・石英・黄白色石などこまかい小石
115	D区	成川式土器	高坏				ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	内: 灰黒褐色 外: 淡茶褐色	良好	金雲母・石英などのこまかい石多い
116	D区	成川式土器	高坏			10.5cm	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	灰白(芯は淡黒褐)	良好	こまかい石
117	D区	成川式土器	高坏			12.5cm	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	良好	長石・白色石・金雲母などの細石
118	D区	成川式土器	鉢				ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	明茶褐色	良好	白色石などのこまかい石
119	排土	成川式土器	鉢				あらいヘラナデ 右下がりナデ	ていねいなヘラ横ナデ	茶褐色	良好	金雲母・石英・白色石
120	D区	成川式土器	鉢			3.5cm	ていねいなヘラたてナデ	ていねいなヘラナデ	明茶褐色 淡黒褐色	良好	茶色石・白色石・黄白色石など小さい石
121	D区	成川式土器	鉢			3.5cm	ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	良好	茶色石・白色石など
122	D区	成川式土器	手づくね	5.0cm	5.3cm	3.0cm	ヘラたてナデ	横方向繊維状ハケナデ	茶褐色	普通	黄白色石・石英・赤色石など小石の多い砂質土

第V章 まとめ

博労町遺跡は今回の調査によって、弥生時代中期、古墳時代前・中期、古代、中世、近世と長期にわたって居住された遺跡であることがわかり、狭い範囲の調査であったが、いくつかの注目される成果が得られた。ここでは、そのなかのいくつかを記し、今後の研究の参考資料にしたい。

1. 低地への進出

稲作農耕が開始されるとともに集落が山間部から低地へ移っていることは、全国的にも早くからいわれており、筆者も昭和50年代に行われた大隅地区分布調査の成果を踏まえて「大隅半島では弥生時代になると、縄文遺跡の密集地であった曾於郡の山間部から肝属平野を中心とした志布志湾沿岸や、肝属川流域へ分布が移る。」と記したことがある。¹⁾

近年、大隅半島においても発掘調査が各地で行われ、従来不明であった低地における遺跡の様相もはっきりしてきた。当遺跡の近くにある高山町東田遺跡・波見西遺跡などの調査成果もそのなかの一例である。それらを紹介し、ここでは肝属平野における遺跡立地について触れてみたい。

全国的にみると、縄文時代前期（曾畑式土器期）において遺跡が低地に多く存在するというような例外的あり方はあるが、概して縄文時代晩期になって低地へ移ってくることが指摘されている。ところが、鹿児島県においては長い間隔でみると、古墳時代まではまだ台地上での居住が多く、低地への本格的進出は古代以降になって開始されるようである。²⁾ 筆者はこうした現象について、当県では広い範囲に広がるシラス台地の存在による沖積平野の少なさ、すなわち水田のできる低地の狭さが水田耕作の開発に影響していると考えている。つまり、耕作地となる場が少ないため、大規模な開田開発工事が始まるまでは集落が耕作地となる低地へ進出することをさまたげたと考えるのである。

沖積地に営まれ、かつ低地遺跡である博労町遺跡では弥生時代中期になって初めて人びとが住み始めている。東田遺跡は肝属平野の海岸近く、標高約4mの低地にあるが、ここでは縄文時代後期中頃から住み始められている。しかし、本格的に集落が営まれるのは縄文時代後期末になってからである。東田遺跡よりやや上流にある波見西遺跡では博労町遺跡とほぼ同じ弥生時代中期後半になって住み始め、集落が構成されている。こうしてみると、縄文時代後期中頃に始まる所と、弥生時代中期に始まる所とがあるが、これが台地から低地への移住と考えるのか、先に記したように山間地から低地への移住と考えるのか、さらには生業の変化によるものと考えられるのかといった問題は今後の課題としたい。ただ、弥生時代中期前半までの遺跡の広がりを見ると、肝属平野においては低地への進出は早くて弥生時代中期後半、本格的には古墳時代になってからかと思える。

2. 弥生時代遺物の位置づけ

南九州の弥生土器編年については数人の人によってすでに検討されているが、まだ確固たるものは出ていない。そうしたなかで博労町遺跡の土器はどのような位置づけができるだろうか。

器種には甕形土器・壺形土器・大型甕形土器・鉢形土器があり、当地方弥生土器器種の特徴である高環形土器の欠如はここでも同様である。

甕形土器は口縁部の形態から4種に分かれる。まず内側が下がるくの字状に近いもので、胴が張らずに底へ移るものがある。これには上面がくぼむものと、ふくらむものがあり、頸部までが短いものと長いもの、さらには内面がややのびて鋤先口縁の名残りのあるものなどがある。次に端部がくちばし状にあがるもの(11)がある。さらには、くの字状となるもの(69)、肩部が外へ張るもの(70)である。46はこれらの中間形態であるが平底となる。胴部上半には2～3条の突帯があるものが多いが、ないものもある。底は充実脚台のものとあげ底脚台のものがある。

壺形土器は口唇部が広がる広口口縁で、胴部の広いものと、口縁が直口して丸みをもった肩になるものがあり、底は平底である。肩には突帯が貼付けられる。

大型甕形土器はL字形に近いくの字状口縁をし、頸部下に台形状つばの貼付けられる二重口縁土器である。個体数は多くないが、大隅半島においてはこの時期には普遍的にみられることから、水甕として使われたものと思われる。なお、当遺跡における大型甕形土器の出土状況は故意に廃棄したものとは思われず、意図的に置いた可能性があることから廃棄においてなんらかの祭祀的行為があったものと思われる。³⁾

鉢形土器は2点のみで、20は樽形甕といってもよい器形をしており、南九州ではあまりみかけないものである。北九州西海岸の影響を受けたものといつてよからう。

これらの土器は、従来の編年からいえば山ノ口式土器にあたり、中期末頃のものと思われる。

石器・石製品には磨製石鏃と砥石がある。また磨製石鏃の未製品が砥石とともに住居跡から出ていることから、ここで石鏃の作られていたことが想定できる。近年このような石鏃製作を示すような出土例が国分市上野原遺跡など各地でみられることから今後、石材・分布などを検討する必要がある。なお、形態では中央に溝があり、このようなものは高山町花牟礼遺跡でも出土していることから当地方の特徴とも考えられる。⁴⁾

3. 古墳時代土師器の特質

南九州の古墳時代土師器は成川式土器と総称され、全国のなかでは特殊な土器文化を形成している。そうしたなかで肝属平野の甕形土器には丸底となる土師器のまざっていることが知られている。

中村直子は古墳時代中期・後期における鹿児島県の土器の地域性を比較している。⁵⁾ 県内を川内平野・肝属平野・薩摩半島および鹿児島湾岸部の3か所(原文では他にえびの盆地を設定)に分けているが、他地域が成川式土器のみで占めているのに対し、肝属平野では成川式土器のみの遺跡、土師器のみの遺跡、両者を共有した遺跡があるという。中村の検討資料に比べ当遺跡のものはやや古い時期のものだが、すでに丸底甕の存在が知られ、中村の分け方でいけば成川式土器が主体で、それに丸底甕が伴う地域といえよう。このような遺跡は当地域では他にもみることができる。

比率的に圧倒的に多い成川式土器のなかにも、この遺跡特有なものが含まれている。それは積み上げ部分をあまりていねいにナデずにその状況を残したものである。39・41・42・119などがそうしたもののだが、これらは在地のものというよりは畿内系土師器の模倣を試みたものであり、模倣の過程で生じたものといえよう。高環形土器も在地系のものには少ないものだが、肝属平野一帯ではこのような器形のものが各地で出土している。

これらは4世紀頃のものと思われる。

4. 古墳とその居住地

博労町遺跡周辺では上ノ原古墳・丸岡古墳群等の円墳、西宮・上ノ原・下西方・横間等の地下式横穴墓など古墳時代の墓が多く見つかっている。狭い地域という視点でみると、南九州でももっとも密にある墓地群といってもいいほどである。ではこれらの墓に葬られた人びとはどこに住んでいたのだろうか。南九州では集落と墓が近くで発見された例はほとんどない。大隅半島では吾平町中尾遺跡で台地縁辺部に場を異にして住居群と地下式横穴墓群が発見されている。この遺跡のようなあり方が他地点においてもあるといえるかは、現在まで他に好例をもたないので今後の発見例を待たねばならない。

このような観点で当遺跡の住居をみると、周辺で造られた墓の前段階の時期であることから、直接つながらないし、少ない数の住居からなる集落規模からしてその後古墳群をつくるだけの権力をもつには淋しいムラである。また、肝属川流域でこの時期に本格的な稲作農耕が始まっていたと考えるには無理があるように思える。このあとまもなくして、この一帯では大規模に水田開発工事が行われ、稲作農耕が始まったであろう。その結果、塚崎・唐仁・岡崎といった大規模な古墳群が造られるようになった。しかし、この時期もまだ大規模な集落は見当らない。博労町遺跡のあるこの段丘は後背に広い平地をひかえており、さらに周辺にはもう少し高い台地をひかえていることから、このあたりを含めて、古墳をつくる人びとの居住地は考えたい。現在、市街地化しているこの地に古墳をつくった人びとの居住地はあるのだろう。

註

- 1) 池畑耕一「原始」『笠沙町郷土誌』上巻 1991 笠沙町

なお、このもとになった資料は下記概報に表で表されている。

池畑耕一・中村耕治『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報－昭和58年度』（『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』29）1984 鹿児島県教育委員会

- 2) 鹿児島県では川内川下流域の川内平野において京田遺跡・大島遺跡・楠元遺跡など低地にある弥生遺跡がある。また、万之瀬川下流域の上水流・芝原などでは縄文時代中・後期、あるいは弥生時代後期末から古墳時代前半の低地遺跡が存在する。

- 3) 古墳時代のものであるが、中村は県内各地で意図的に置かれたと考えられる土器（片）のあることを指摘し、集成している。

中村直子「住居跡およびその周辺における土器出土状況の特殊な事例について－南九州古墳時代を中心として」『鹿児島考古』第38号 2004 鹿児島県考古学会

- 4) 曾野壽彦「南九州の弥生式土器－大隅半島の二弥生式遺跡を中心として」『考古学雑誌』第37巻第2号 1951

- 5) 中村直子「古墳時代における南部九州在地土器と土師器との関係性」『鹿児島大学プロジェクト報告書 新しい関係性を求めて』2004

写 真 图 版



1号・2号住居跡検出状況



1号住居跡



2号住居跡遺物出土状況



2号住居跡遺物出土状況



溝 1, 2 及び土坑



溝 1, 2 の切りあい (西側から)



溝 1, 2 の切りあい (東側から)



溝 2 及び断面



溝 1 及び断面



溝 2 遺物出土状況

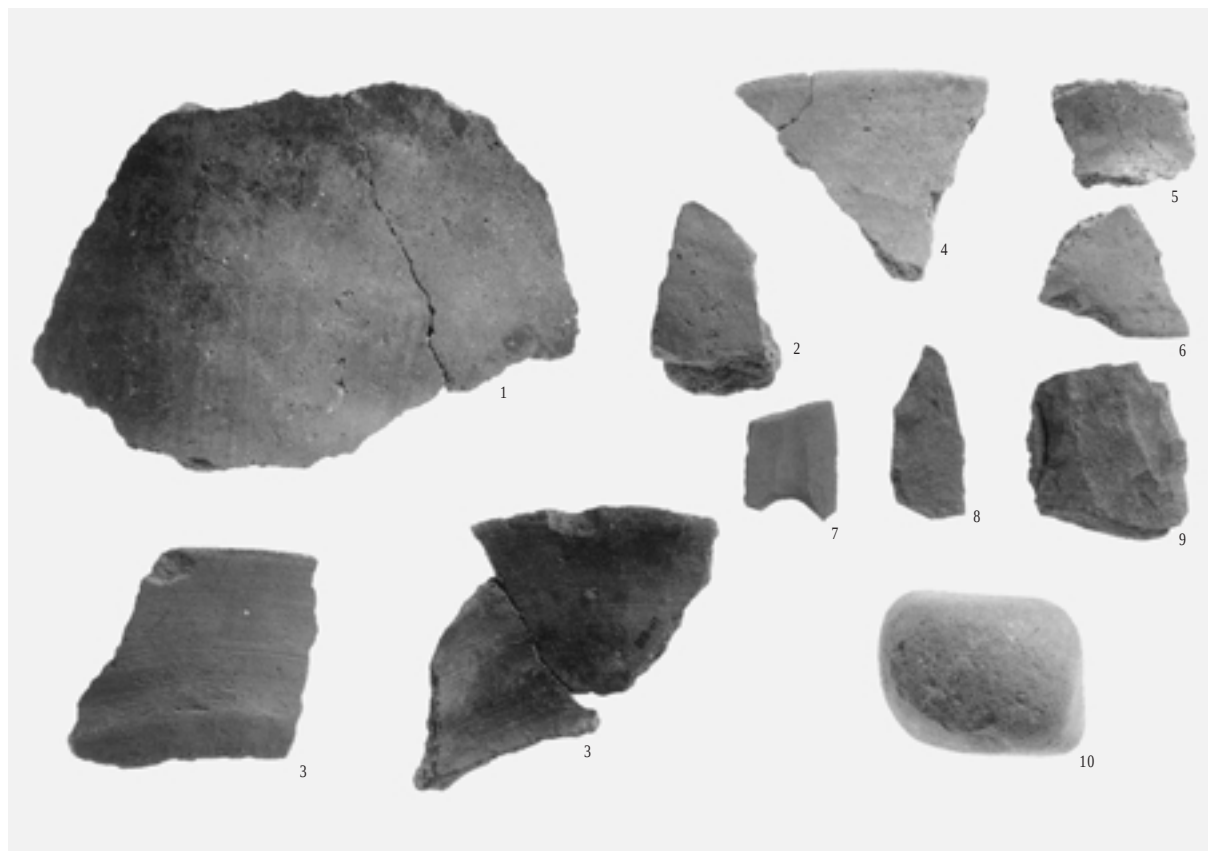


溝 2 遺物出土状況

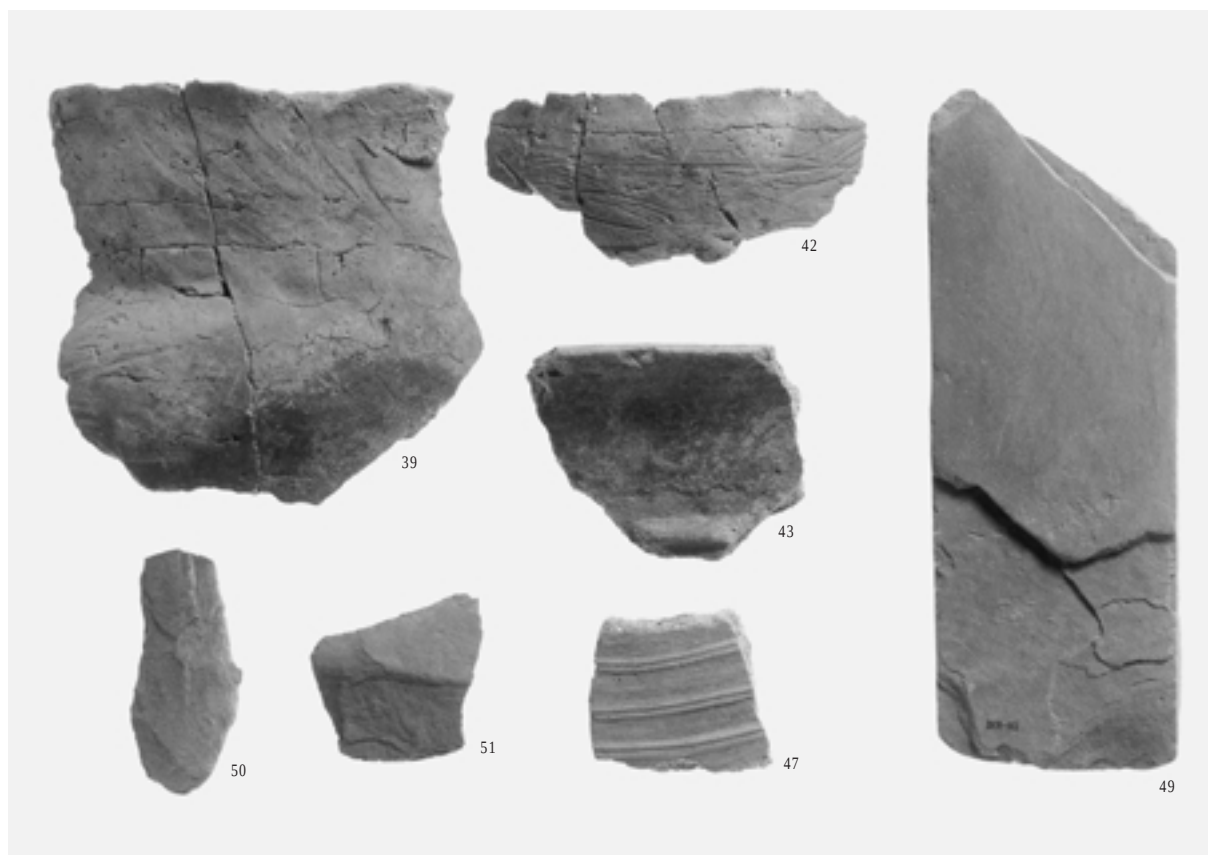


土 坑

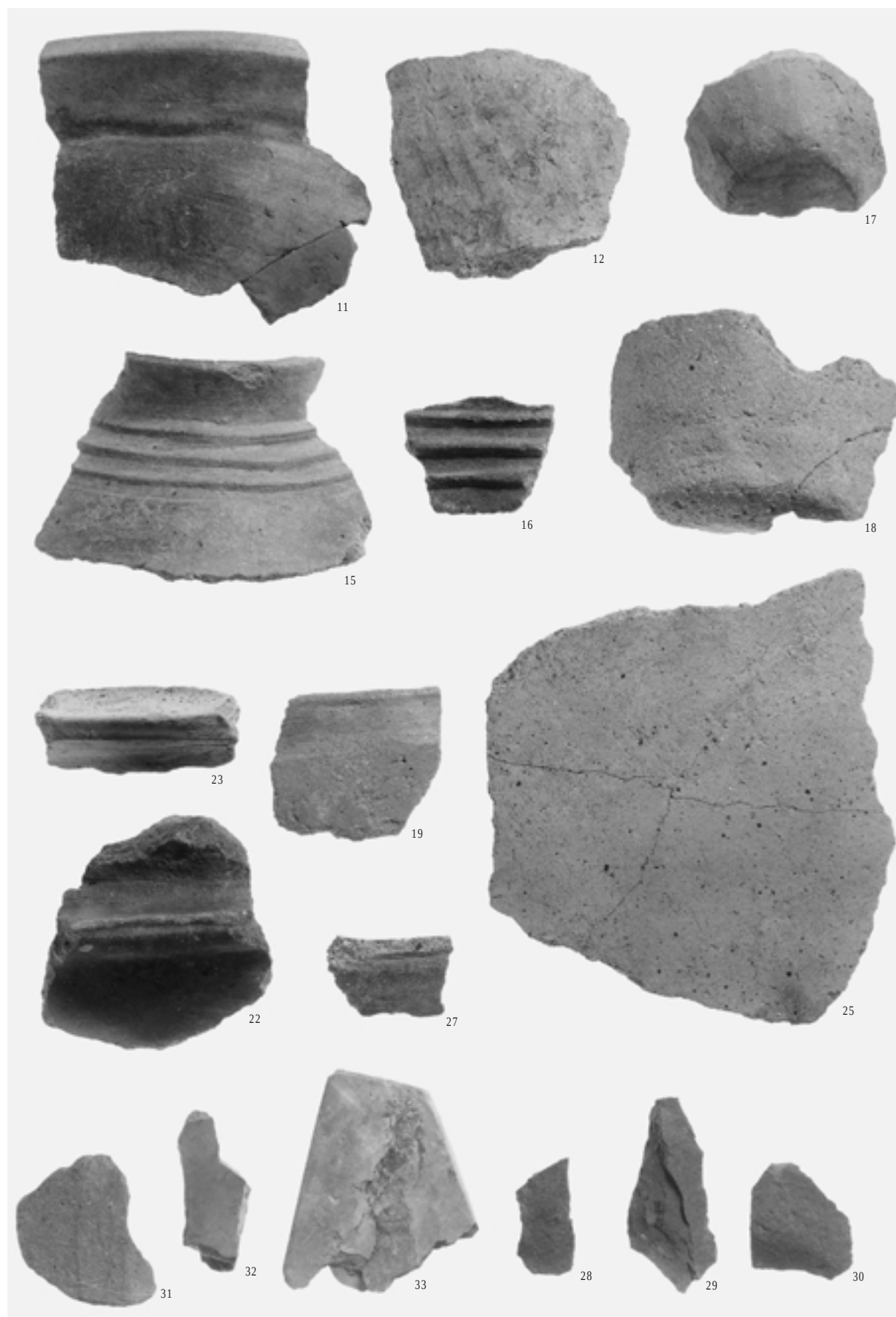
図版6



1号住居跡出土の遺物

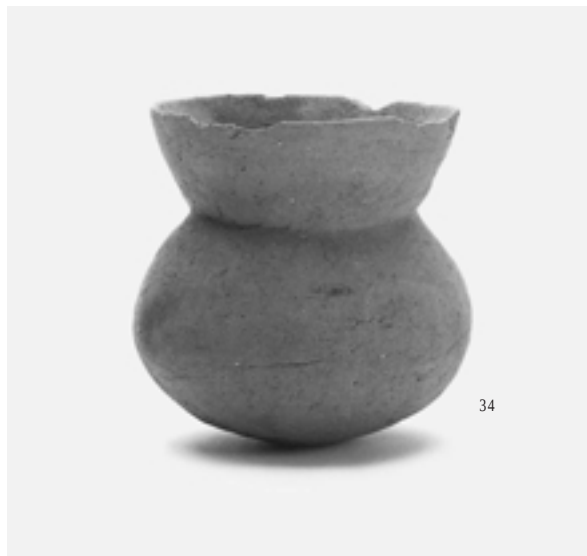


土器溜り出土の遺物



2号住居跡出土の遺物

図版 8



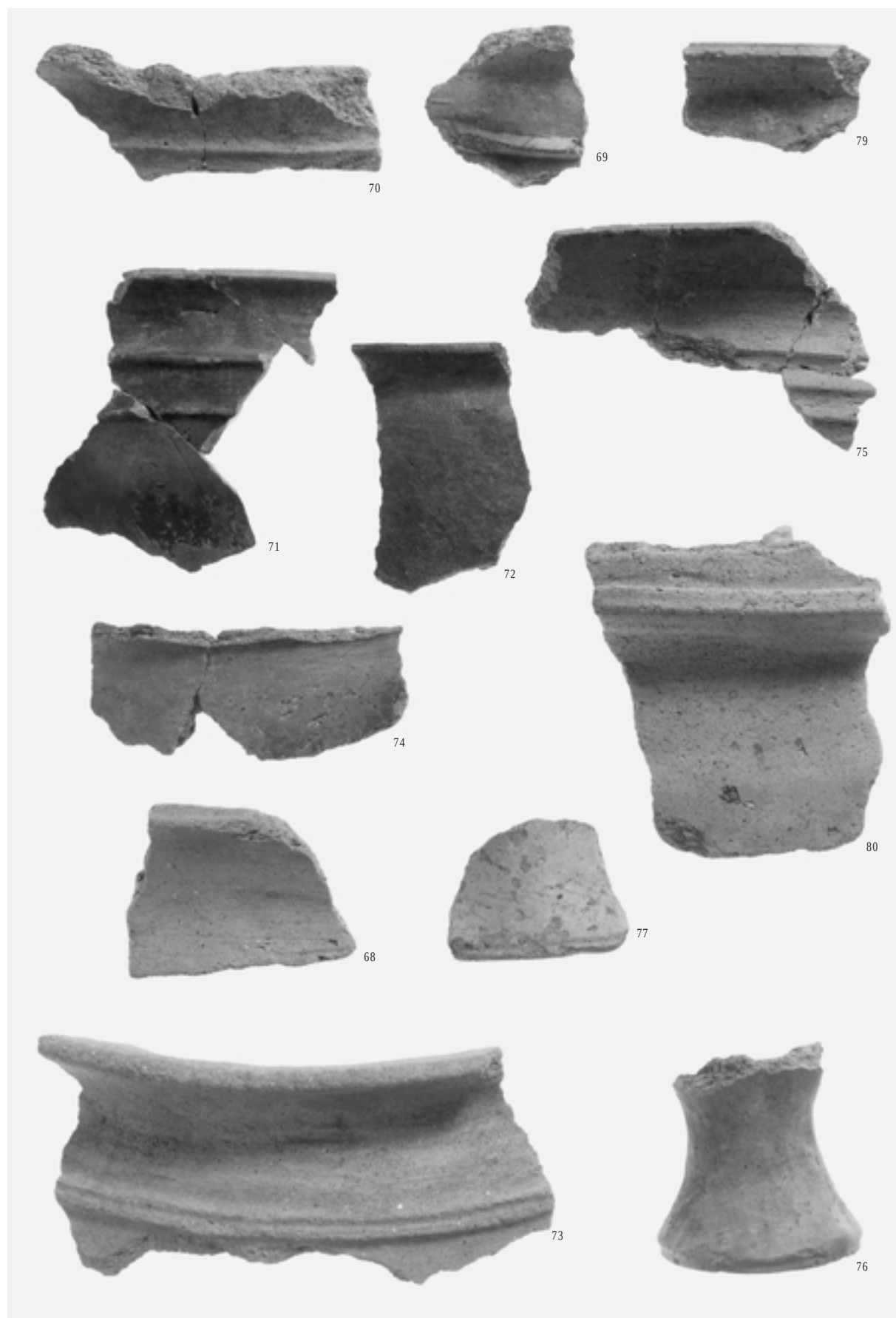
弥生土器と古墳時代の土器



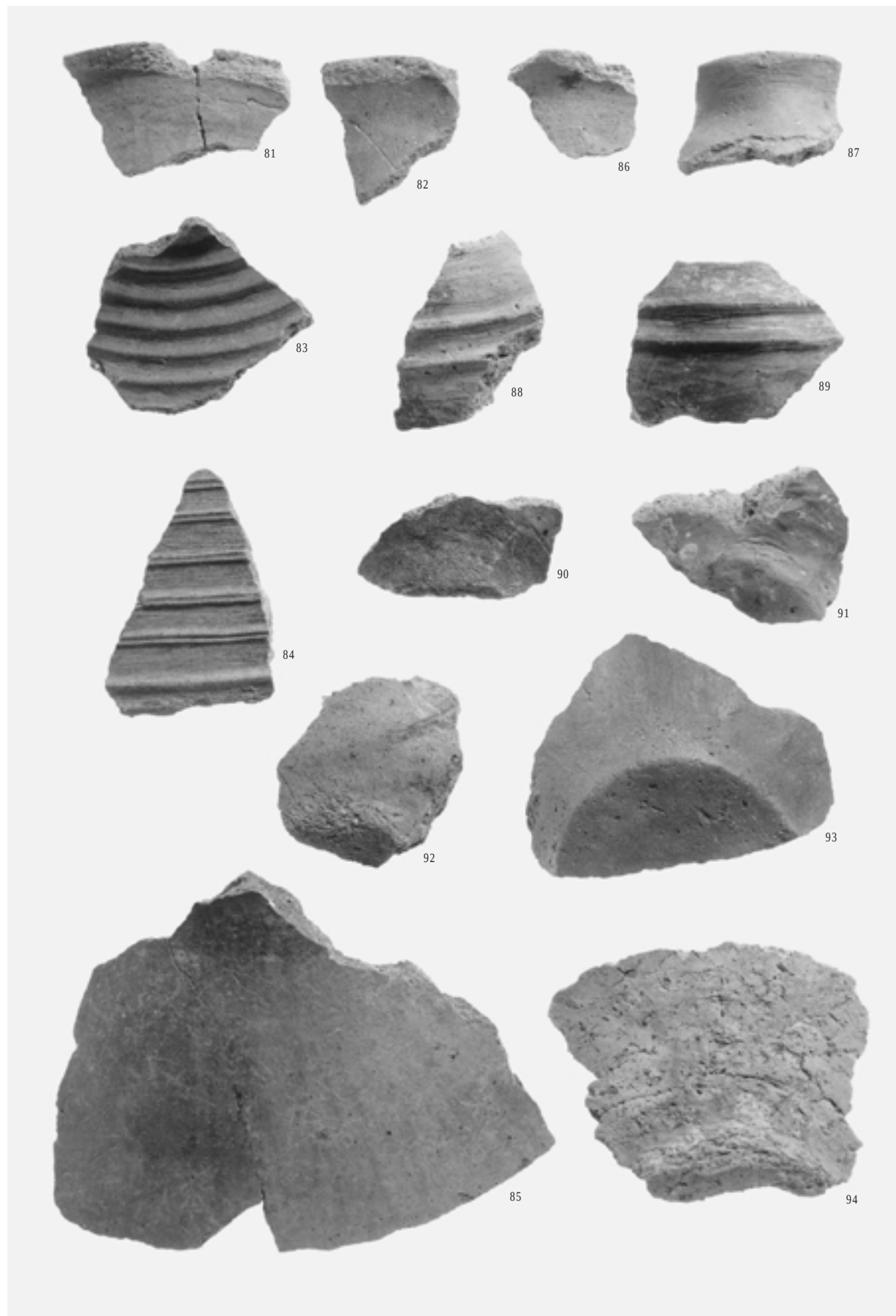
弥生土器と古墳時代の土器



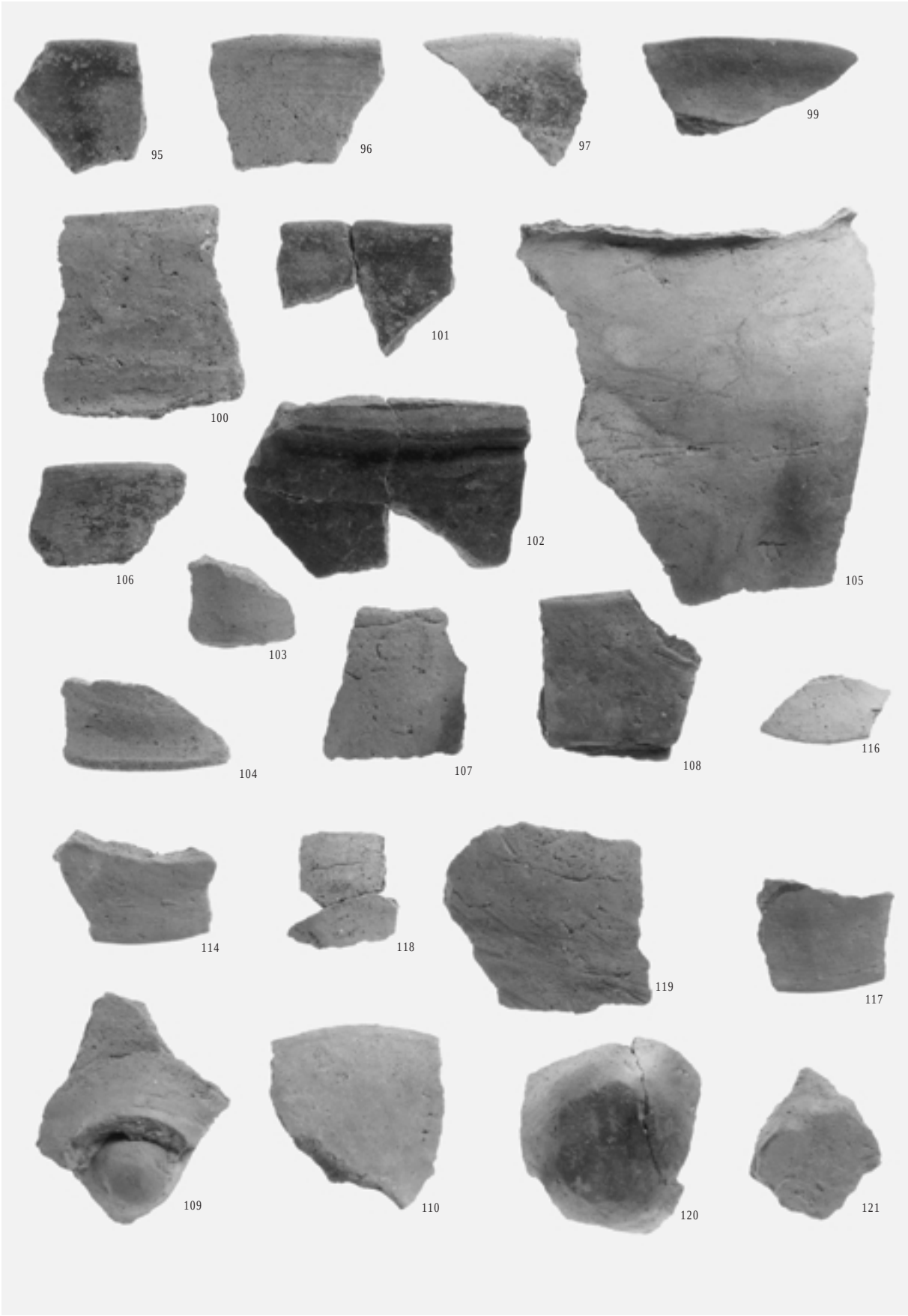
弥生土器



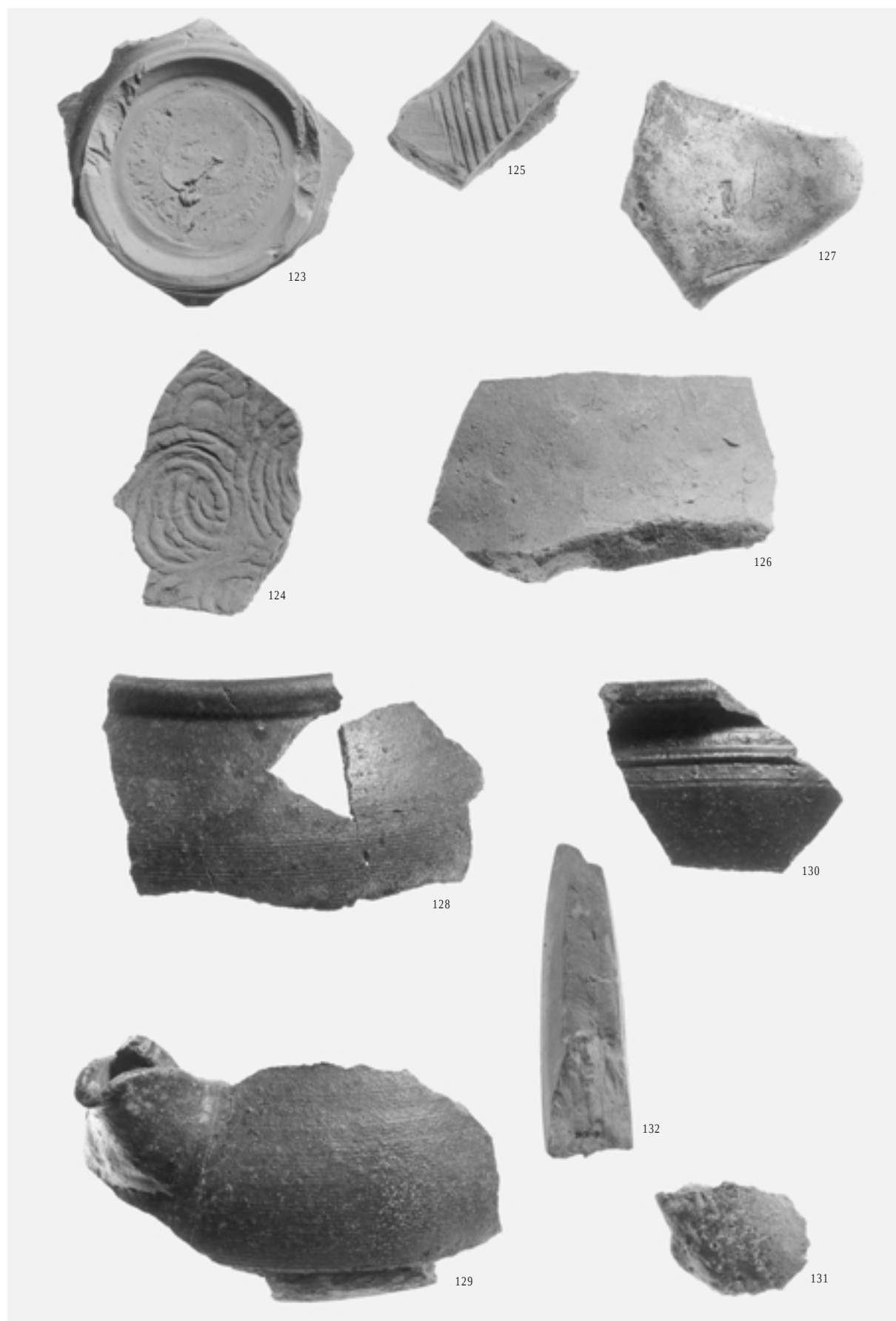
弥生土器



弥生土器



成川式土器



古代以降の遺物

あ　と　が　き

博労，これは馬喰とも記するが，国語辞典によると「馬の良し悪し・病気などを見分ける人」「馬の売買をする人」「物と物とを交換すること」と出てくる。つまり博労町というのはそうしたものを見きわめる地，つまり馬や物のせり市のある場である。古来，高山の地はそうした地であった。それだけでなく古い前方後円墳の存在する場，肝属川河口を利用した交易基地でもあった。

そういう由緒ある地の調査はその地がいつから使われたかということを見極める調査であった。その結果，そうした問題を解くさまざまな資料が出てきた。それを見出し世に出そうとした人達がいたにもかかわらず，いろんなことがあってまとめは私がすることになった。市街地の調査ということもあって大変な苦労をされた調査者にとってはそれだけに物足りない報告書であるかもしれない。事実報告等について間違いがあるとすれば，その責任はすべて編者にある。御容赦願いたい。

また，この本を出すにあたり都市計画課と文化財課の担当者には大変な苦労があったものと思える。こうした苦労のなかでなんとか仕上げることができたのは，それらの人とともに調査・整理にあたった人の協力があったからである。最後になったが深く謝意を表したい。(池畑)

(整理作業) 新中泰代・川路加代子・野崎裕子

(浄　書) 山元宏子・福山霧子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (77)

地方特定道路整備事業（新富1工区・宮前通線）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

博 労 町 遺 跡

発　行　2004年12月

編　集　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1
T E L (0995) 48-5811

印刷所　株式会社あすなろ印刷
〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36
T E L (099) 250-7033